

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Gift Exchange and Social Networks among the Murut of Sabah, East Malaysia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上杉, 富之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004162

ボルネオ・ムルット社会の葬礼に見られる
贈与交換と社会関係

上 杉 富 之*

Gift-Exchange and Social Networks among the Murut
of Sabah, East Malaysia

Tomiyuki UESUGI

It is generally accepted that in cognatic societies like those in Borneo there can be no stable and exclusive corporate group based on kinship. Instead, an ego-centered category of kindred has been considered to play a main role in forming various kinds of occasional action group. However, we do not have much data on how kindred is activated to form action groups such as work groups in cultivation, hunting or feast hosting. Nor have we fully explored alternative social networks which can be used for organizing or structuring cognatic societies. In this article I describe the gift-exchange and social networks observed in a funerary ritual among one of the cognatic societies of Borneo, namely, the Murut society of Sabah, East Malaysia. By examining these I argue that there are two different kinds of gift-exchange, an irreversible unequal bridewealth/food exchange between wife-taker and wife-giver and a reciprocal equal gift-exchange between longhouses or villages, and that these constitute the basic principles in forming wide and deeply infiltrated social networks among Murut society.

* 国立民族学博物館第2研究部

Key Words : Borneo, the Murut, cognatic society, funerary ritual, gift-exchange, bridewealth, social network

キーワード : ボルネオ, ムルット族, 双系社会, 葬礼, 贈与交換, 婚資, ソーシャル・ネットワーク

はじめに	1) 食物の調達
1. 葬礼	2) 婚資の調達
2. 埋葬と忌み明けの儀礼	6. 婚資と食物の分配
3. バギンバヤン儀礼	1) 婚資の分配
1) 準備	2) 食物の分配
2) 経過	7. 贈与交換関係の連鎖
4. 儀礼の参加者	1) 儀礼参加者の系譜関係
1) 主催者側	2) 相互扶助関係
2) 賓客側	3) 儀礼における社会関係のモデル
5. 食物と婚資の調達	おわりに

はじめに

本稿は、ボルネオ島サバに居住するプロト・マレー系焼き畑農耕民・ムルット社会の葬礼（バギンバヤン儀礼）に見られる贈与交換を記述し、その分析を通して、双系社会と規定されるムルット社会の社会組織上の特徴を明らかにすることを目的とする¹⁾。

ニーダムの整理 [NEEDHAM 1971: 10] に従うと、親族集団への帰属ないし親族関係のたどり方の形式は父系、母系、両系、双系、平行系、交叉系の6種にまとめられるという。その中で、双系は父・母両者の集団へ同等に帰属が可能な形式であるため、一般に境界が明確で安定した団体 (corporate group) を組織しにくいと言われている [cf. ERIKSEN 1995: 86-87]。にもかかわらず、双系社会と規定しうるボルネオのイバン社会では、かつて数百人にもものぼる戦闘集団を編成して海賊行為を繰り返したり、英国等の植民地勢力に対して武力抵抗を続けていたことが記録されている [cf. BROOKE 1866; DUNN 1906; GOMES 1911; Low 1968 (1848); ROTH 1968 (1896)]。集団を組織しにくいと言われるボルネオの双系社会・イバン社会において、いったいどのようにして多数の人間が戦闘へ動員されていたのであろうか。こうした疑問が生じるのも当然である [cf. SAHLINS 1958: 313]。

武力衝突の一方の当事者である英・蘭等の旧植民地政府側には、イバン族の戦闘集団に関する「客観的」な歴史資料は残されていない。むしろ、意図的にそれを矮小化し、敵対するマレー貴族による煽動・組織化のみを強調する。鎮圧すべき「反乱軍」は野蛮・どう猛な「首狩り族」の烏合の衆であって、秩序立った組織が存在してはならなかったのである [上杉 1986参照; PRINGLE 1970; WAGNER 1972]。従って、

イバン社会の戦闘集団がどのようにして組織されていたのかを歴史資料によって再構成するのはまず不可能である。また、それが本稿の目的でもない。

第二次世界大戦後、イバン社会の詳細なモノグラフを著したフリーマン [FREEMAN 1955, 1956, 1958, 1960, 1961, 1970, 1981, 1992] は、社会範疇としてのキンドレッドに着目することによって、双系社会の組織原理に関する上記のような疑問に解明の糸口を与えた。すなわち、イバン社会には出自集団や制度的な権威、指揮組織が欠如してはいるが、キンドレッドのネットワークが広範囲に存在し、その連鎖を利用して大規模な戦闘集団等が短日時の内に編成されうるとしたのである。以降、キンドレッドは、イバン社会のようなボルネオの焼き畑農耕民社会のみならず、さまざまな社会において広くその存在の有効性が検討されるに至っている [上杉 1995]。しかしながら、最近、双系社会に関する諸研究を批判的に検討したケンプラ [KEMP and HUSKEN 1991] が述べているように、キンドレッドを含めたさまざまな社会関係が、実際にはどのような場面で、具体的にどのように維持されたり顕在化されるのか、などといった実証的な研究は現在に至るまで必ずしも十分にはなされていない²⁾。

以上のような観点から、筆者は既に、ボルネオの焼き畑農耕民ムルット社会の調査資料に基づいて、婚姻儀礼における贈与交換や農作業における労働力の調達法、「原住民裁判所」の判例等に見られる具体的な事例を詳細に記述・分析してきた [上杉 1991a, 1991b, 1992, 1993a, 1993b; UESUGI 1995]。本稿では、さらに、ムルット社会で盛大に営まれる葬礼に焦点を当て、そこに見られる贈与交換関係を中心とした社会関係を検討してみたい。

以下、第1章でまずムルット社会における葬礼の概略を述べ、第2章～第3章では、埋葬や葬礼の手順や経過を具体的な事例に則して記述する。その上で、第4章～第7章では、事例とした葬礼（バギンパヤン儀礼）の参加者の間に見られる贈与交換関係という社会関係を分析して、ムルット社会の社会組織上の特徴を明らかにする。

ムルット族は、東マレーシアのサバ州南部を中心に、サラワク州やインドネシア領カリマンタンとの境界付近に居住するプロト・マレー系の焼き畑農耕民である。サバ州におけるムルット族の人口は、現在約4万人程度と推定され³⁾、言語・文化的に、さらに低地ムルット族と山地ムルット族に大別される。低地ムルット族の多くは今では個別家屋に住んで定着農耕を行ったり、ゴム農園や商店、製材所で働くなどさまざまな職業に就いている。一方、山地ムルット族は今でもロングハウスに住み、焼き畑で陸稲やキャッサバを栽培するかたわら狩猟や魚撈で副食物を得るなど、基本的には自給自足の生活を維持している。本稿で記述・分析の対象とするムルット族は後者の

山地ムルット族に属し、彼らの居住地域を流れる主要河川名に因んでタガル・ムルット (Tagal Murut) 族とも呼ばれる (以下、本稿では、タガル・ムルット族をただ単にムルット族として記述する)。なお、本稿で提示する資料は、1988年10月から1990年9月までの約2年間にわたるフィールドワークと、その後の補充調査から得られたものである⁴⁾。

1. 葬礼

ムルット社会ではかつて、遺体をバンカラシ (*bangkalan*) と呼ばれる大きな甕またはルングン (*lungun*) と呼ばれる木棺に納めていた。甕棺や木棺に納めた遺体は、ロングハウス内の生前の個室にしばらく安置したのち、パンサウ (*pansau*) と呼ばれる墓ないし遺体安置小屋⁵⁾に移しそこに安置した。というのも、忌み明けの儀礼 (*limpas nu apui* ないし *limpas nu salong*) までの期間に遺体の腐乱・腐臭が甚だしく、ロングハウス内に安置することがはばかられたからだという。また、死霊への恐れもあった。遺体を遺体安置小屋からさらに移して、土中に埋葬することもあった。しかし、遺体安置小屋に放置したままでも朽ち果てるに任せる自然葬の方が一般的であった。

遺体を遺体安置小屋へ移したり埋葬した後は、墓参り等の儀礼をすることはなかった。しかし、忌み明けの儀礼の数カ月ないし数年後に、死者を吊ってアングクラン (*angikulan*) と呼ばれる法事を行うこともあった。

現在、ムルット社会の大多数の人びとはキリスト教ないしイスラム教を信奉している。このため、遺体を甕棺に納めて遺体安置小屋に安置するようなことはもはやほとんどない⁶⁾。遺体は木棺に納棺後、土中に埋葬するのが一般的である。遺体は納棺後しばらくはロングハウス内の生前に住んでいた個室に安置するが、数日以内に墓地に埋葬ないし仮葬し、その後すぐに忌み明けの儀礼を行う。納棺後、死者の近親者たちが遺体に触れることはタブー視されているため、遺体の運搬や埋葬等、遺体の処置はすべて死者の「娘の夫」ないし「姉妹の夫」たちの義務とみなされている。

遺体の埋葬後、数カ月から数年経って、パギンパヤン (*pagimpayan*; 「[遺体の] 遺棄」) ないしイラウ・ラ・バンカイ (*ilau ra bangakai*; 「死者の祭り」) ないしタバール (*tabal*) と称される儀礼を営む。パギンパヤン儀礼では、仮葬していた遺体を新たに埋葬し直すこともある⁷⁾。この場合には、同時に埋葬地の下草や木を刈り、新たに墓碑を建立する。墓碑は、キリスト教徒の場合には十字架を利用する。また、墓地およびその周辺をセメントで固め、墓碑の上にはトタン葺きの屋根を据え付ける。パ

ギンパヤン儀礼においても、遺体の再埋葬や墓の造営等はすべて故人の「娘の夫」や「姉妹の夫」たちの義務とみなされている。パギンパヤン儀礼では、故人を偲ぶため、また故人の娘の夫や姉妹の夫たちのこうしたサービスに対して、遺族たちは盛大な宴会を催す。

ムルット社会で上記のような「複葬」を行うのは、交通の便の悪い山岳地域で、セメントやトタン、板など、死者の墓や屋根の材料を調達するのにかなりの時間がかかるからだと言われている。また、パギンパヤン儀礼で消費する大量の食物や嗜好品を、儀礼の主催者側で準備するためでもある。死後、遺体を取りあえず仮葬しておいて、周到な準備のもとに改めて墓を造営し、盛大に故人を弔うためにはそれなりの時間を要するのである。

パギンパヤン儀礼では大量の食物を短時間の内に調達したり、かなりの費用を要する墓を新築しなければならない。この儀礼ではまた、婚姻儀礼等において見られる、婚資と食物の儀礼的贈与交換と同じような大規模な贈与交換が行われる。「娘の夫」や「姉妹の夫」たちから故人に捧げられる壺やドラ等の威信材は、故人に対する最後の「婚資」とみなされている。そこで、本稿では、以下、パギンパヤン儀礼で贈与される壺やドラ等の威信材も、ムルット社会における広義の婚資に相当するものとして記述・分析する⁸⁾。

2. 埋葬と忌み明けの儀礼

以下、ムルット社会における遺体の埋葬と忌み明けの儀礼について、ナバワン/ブンシアンガン地区、パガルンガン・ムキムのティナンドゥック (Tinanduk) 村で1989年10月に営まれた具体的な事例に則して、その手順を明らかにしてみたい。

行政村としてのティナンドゥック村は3つの自然村から成り、1988年当時の人口は261人であった。自然村としてのティナンドゥック村は3つのロングハウスないし長大家屋から成り、それぞれ3部屋、7部屋、10部屋の個室 (*sulap*) を有していた (図1参照)。(本稿では以下、これらのロングハウスを便宜的にロングハウス A, B, C と呼ぶことにする。) それぞれの個室には、理想的には、一組の夫婦とその未婚の子どもたちからなる家族 (*sansulapan*) が暮らす⁹⁾。

さて、1989年10月12日、午後4時半過ぎ、ロングハウス B の一室で、60才半ばの男性 Anguyung が老衰のため死を迎えた。臨終の席には、同じロングハウス B に住む死者の息子たちや近親のほか、婚出した娘たちやその夫たちが駆けつけていた。

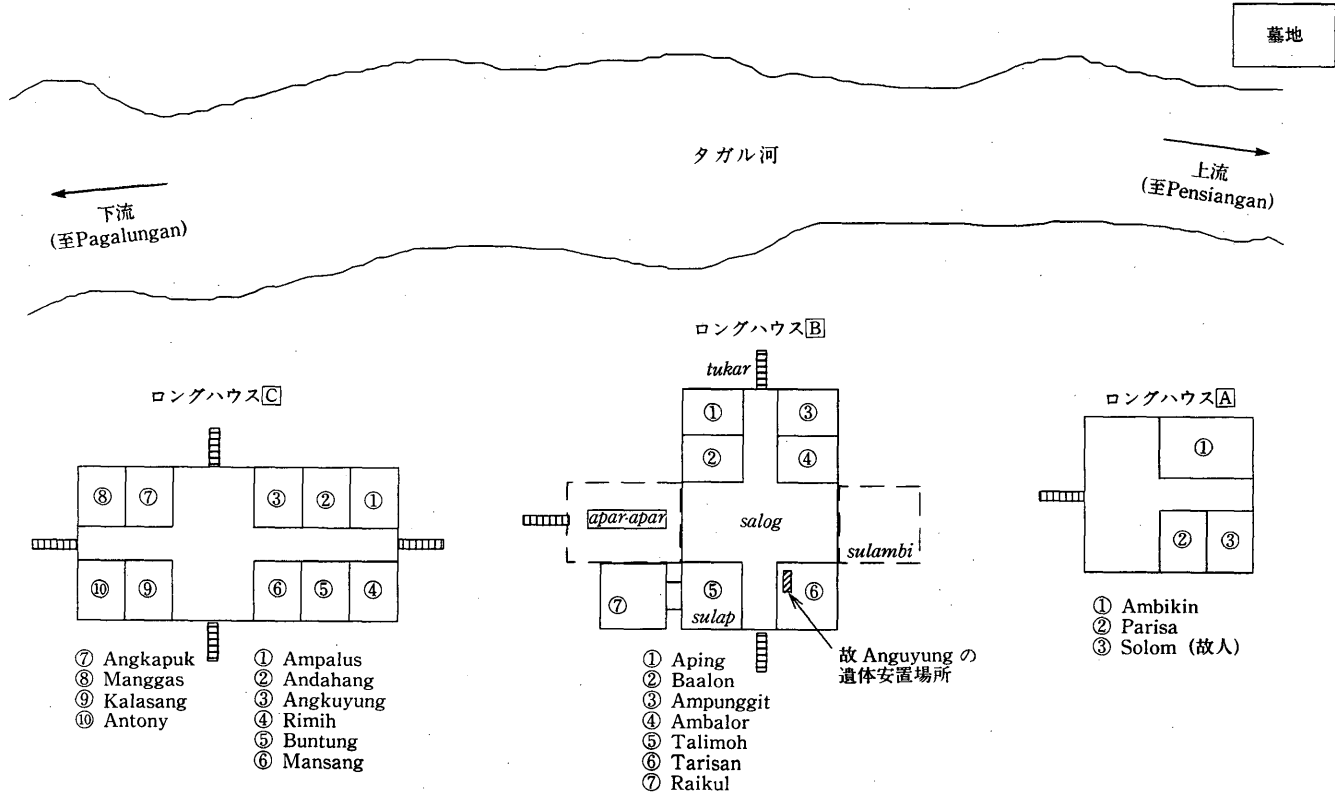


図1 ティナンドゥック村の概念図

臨終直後には、死者の回りに集まっていた娘たちが突然大声で泣き出した。死者の長男 Tarisan は目頭を押さえつつ、臨終を知らせるドラをひとしきり打ちならした。また、次男の Talimoh は亡き父の手を胸の前で組ませた。その後、死者の息子や娘たちが死者の体を水で清め、新しい洋服に着替えさせた。傍らには死者の妻が、白装束に着替えて座り込んでいた。

死者のもとへ駆けつけてきた弔問客（義理の息子や兄弟たち）は、各々10マレーシア・ドル紙幣を死者の手に握らせた。

その間、死者の娘たちは故人の髭を剃り、腕時計をはめさせて身繕いさせた。息子たちは髭剃りを手伝っただけで、あとはすべて娘たちが取り仕切っていた。婚出した娘たちは三々五々到着し、遺体の前で代わる代わるまるで一定のリズムをつけるかのよう泣いていた。

一方、既に到着していた死者の娘たちの夫、すなわち故人の義理の息子たちは、ロングハウス B の傍らで棺桶を組み立てていたが、それに赤いペンキを塗って最後の仕上げに取りかかっていた。

葬礼に駆けつけた義理の息子たちの家族は、ロングハウス B の回廊 (*salog*) の一画に、自分たちの寝泊まりの場所を確保していた。夕方 6 時頃、彼らに対して、遺族側からコーヒーや紅茶が提供された。

夕方 6 時半頃、義理の息子たちはできあがった棺桶を死者の個室に運び込んだ。

夜 8 時頃、近くの村に住むキリスト教の一宗派 (*Sidang Ingil Borneo*) の牧師が到着した。遺族立ち会いのもとで聖書の一節を読み、死者を送った。

その後、死者の息子たちは故人の遺体を棺桶の中に安置した。納棺時、娘たちは再び泣きながら、死者との最後の別れをした。

納棺後、回廊に控える義理の息子たちやその家族には酒食が振る舞われた。

翌10月13日の朝、女たちは故人の墓地を飾るビーズ製の飾りスクル (*susukur*) を作った。一方、故人の息子たちは、夜を徹して弔問客を酒でもてなしていた。

この日は、午前中から遠方に住んでいる死者の娘や義理の息子たちが、ボートに乗って続々とやってきた。

同日午後、遺体に蠅がたかり始めたので棺にふたをし、樹脂で目張りをした。この時、女たちは再び激しく泣き、遺族側の古老が短く強くリズムをつけてドラを叩きつけていた。納棺後、当初赤く塗られていた棺が白く塗り直された。そして、ふたの上部には黒いペンキで十字が描かれた。また、棺のそばの壁には、白地に黒い十字を縫いつけた布がたらされた。

翌10月14日、葬礼に参列した客をもてなすために、遺族側が用意した水牛3頭がほふられた。その内の1頭は、イスラム教徒の参列者のために、イスラム教の教義にのっとってはふられた。

同日12時頃、参集していた義理の息子たちが墓穴を掘るために対岸の墓所 (*lolobongon*) に向かった。墓地はタガル河を挟んでティナンドック村の対岸に位置し、ボートに乗って約5分ほどの上流にあった。墓穴掘りは夕方まで続けられたがその日には終わらなかった。

10月15日にも、早朝と夕方にそれぞれ2～3時間ほど墓掘りが続けられたが終了しなかった。結局、墓穴を掘り終わったのは10月16日の午前であった。墓穴の長さ、幅、深さはそれぞれ約1.7, 0.6, 0.9メートルであった。

10月17日の午前9時過ぎ、棺を2本の竹棹の上に固定してロングハウスから墓地へ運び始めた。棺を担いでいたのはすべて、故人の「娘の夫」や「姉妹の夫」たちであった。棺が担ぎ出され始めると、女たちは思い出したように再びいっせいに泣き始めた。ボートに乗せて対岸の墓地まで運ぶため、棺は故人の生前の個室から回廊を通過してタガル河のボート乗り場へと担ぎ出されていった。最後尾には、一人の男がドラを叩きながらつき従っていた。一方、女たちはロングハウスの昇降段 (*tukar*) の手前で死者を見送り、ロングハウスから一步も外へ出ることはなかった。棺とともに、死者があこの世で使う木製の山刀などをぶら下げた竹筐で作った飾り、イラウイラウ (*ilau-ilau*) も運ばれた。

死者の近親の男たちは墓地のある対岸まで同行した。しかし、故人の三男である **Raikul** を除き、誰も墓地には降り立たず、そのまま村に引き返していった。ちょうどこの頃、前日死者を送った牧師がこの場で合流し、埋葬場所まで同行した。土手の上の墓地に着くまでずっとドラは叩き続けられていた。

墓地に到着すると、棺はあらかじめ掘られていた墓穴に納められ、セメントで塗り固められて長方形の墓が作られた。そして、墓の上に直接故人の名前と生年月日・死亡年月日が記入されて埋葬は昼までには終了した。墓の上には菓子や紅茶、タバコなど故人の好物が盛られた碗が置かれた。また、皿やコップなど死者が生前使っていた食器も添えられた。墓の全面には、竹筐で作った飾りイラウイラウが立てられた。最後に牧師が埋葬者とともに故人に祈りを捧げ、その後すべての者が帰路についた。帰路もロングハウスに戻るまで再びドラが叩かれた。

遺族たちが待つロングハウスに帰り着くと、ロングハウスへと続く昇降段の最上段で、ヤシ殻に入ったダマール樹脂 (*salong*) が燃やされて白い煙を上げていた。牧師

を除く、墓地に向かったすべての者がこの煙で体を清めてロングハウスに入った¹⁰⁾。この行為を「火をまたぐ (*limpasu nu apui*)」とか「ダマールをまたぐ (*limpasu nu salong*)」と言い、死にともなう死霊や悪霊を追い払う象徴的な行為とみなされている。この忌み明けの儀礼が終了すると、死者の配偶者や近親以外の者の喪は明ける。遺体埋葬と忌み明けの儀礼が終了すると、婚出した故人の娘や姉妹の家族等、他のロングハウスから来た者は三々五々帰宅の途についた。

3. パギンパヤン儀礼

ムルット社会で埋葬ないし忌み明けの儀礼の数カ月後に、パギンパヤン儀礼と呼ばれる葬礼を改めて催すことは既に述べた。以下では、前述した埋葬や忌み明けの儀礼に引き続いて催されたパギンパヤン儀礼について、その経過と手順を、準備の段階から順を追って述べてみたい。

1) 準備

Anguyung の埋葬や忌み明けの儀礼が行われた翌1990年の1月中旬、故人の長男 Tarisan らは、故人のパギンパヤン儀礼をその年の稲の収穫後に開催しようと考え、その旨をティナンドック村の寄り合いで告げて村人の賛同を得た。さっそく、その場でパギンパヤン儀礼の開催日が4月半ばに決められ、また儀礼への招待者も選定された。Tarisan らがこの時期にパギンパヤン儀礼の開催を申し出たのは、この年の稲の収穫を間近にして豊作が期待され、客をもてなすのに十分な米が確保できると見込めたからである¹¹⁾。

その後、今やパギンパヤン儀礼の主催者となった Tarisan は、3月半ばに入って儀礼への招待客に、籐に結び目を付けた結縄 (*tibuku*) を添えて招待状を出した¹²⁾。

これ以降、儀礼開催当日まで、主催者側では米やタピオカ (キャッサバ澱粉) などの食物の準備に取りかかった。特に発酵肉 (*tamba'*) 等に加工するための肉の確保に努め、狩りに頻繁に出かけた。

儀礼の数日前には、主催者側は、多数の賓客が寝泊まりできるように、ロングハウス B の回廊部にスランビ (*sulambi*) と呼ばれる小屋を建て増した。また、酒宴会場として、スランビの反対側の回廊も建て増して酒の肴を置く棚 (*apar-apar*) を据え付けた (図1参照)。

一方、招待客の一部はこの頃に先着し、既にセメントで固めてあった故 Anguyung

の墓の回りに、鎖付きの柵を巡らせる工事を施した。

2) 経過

故 Anguyung を弔うパギンパヤン儀礼自体は、ティナンドゥック村のロングハウス B において、1990年4月16日の夕刻から20日の早朝までの5日4晩にわたって催された。以下、日を追ってその経過を述べてみたい。

① 4月16日（初日）

4月16日の午前、招待客たちがティナンドゥック村に次々とやってきた。客は、ロングハウス B の回廊の端に建て増しされたスランビの一面に各自の寝泊まりの場所を順次確保していった。

昼過ぎの午後1時半頃に、主催者側から客たちにコーヒーや紅茶、タバコ、キンマ、菓子などが提供された。同じ頃、ロングハウスの外では、主催者側と客側の間で闘鶏が開始された。しかし、雨のため途中で中断された。

雨が小降りになった午後2時過ぎ、シカラボット (Sikalabot) 村やシブアヨ (Sibuayoh) 村から、酒や発酵肉、イノシシの肉等の援助物資・タバン (tabang) を持った一行が同時に到着した。彼らは、後述するように、本来の客である招待客やその同行客からは区別されている。しかし、彼らもスランビやロングハウスの回廊の一面に各自の場所を確保してそのまま儀礼に客として参加した。

午後4時頃、シカラボット村とシブアヨ村からの客に対しても茶菓のもてなしがあった。外では雨が上がり、中断されていた闘鶏が再開された。

夕方の5時半過ぎ、シブアヨ村からさらにインダガン (indangan) と呼ばれる、長さ3メートルほどの木製の新品のカヌーに盛りつけられた米飯や缶詰等の食物が届けられた。これも、タバン (援助物資) の一部であった。

午後6時頃になって、正式なもてなし (ansubak) が開始された。まず、主催者側の男たちはタバコやキンマ等の嗜好品を、ロングハウス回廊中央部の客の前に、一列に並べて置いた。また、主催者側の女たちは大量の飲み物や菓子等をその傍らに整然と並べて置いた。その後、客たちは提供された嗜好品や菓子等を家族ごとに分けて食べ始めた。

7時近くになって、今度はシカラバアン (Sikalabaan) 村から酒や米、砂糖等の援助の食物 (タバン) が届けられた。彼らシカラバアン村の一行も、スランビの一面に場所を占めてそのまま儀礼に参加した。援助物資であるタバンとして届けられた食物

はしばらくロングハウスの回廊に陳列された後で、主催者側の各家族にはほぼ均等に分配された。

8時少し過ぎには食事も終了し、客たちは各自が食べた食物の容器や皿を元のロングハウス回廊の中央部にもどした。この時、提供されたタバコや菓子、飲み物等に対する返礼として現金がそれぞれの容器に添えられた¹³⁾。

客たちへの、茶菓による正式なもてなしが終了した頃、タバンを運び込んだ人たちに対して飯、イナウ (*inau*; タビオカを糊状に調理したもの)、水牛肉のスープ、イノシシ肉の発酵肉 (*tamba' nu asi'*) などの食事がまず提供された。

その後、賓客たちへもイナウや粥、水牛肉のスープ、イノシシ肉のスープ、イノシシ肉の発酵肉等の食事が提供された。上述した正式な嗜好品や茶菓の提供の時とは違って、この時の食事に対しては客が現金による返礼をすることはなかった。

タバンを運び込んだ村人たちが食事を終えると、彼らは回廊の一画に用意された酒宴の場に導かれ、主催者側から壺入りの酒を勧められた。酒宴の場には、酒の肴を置く棚が据え付けられ、その両側には米やキャッサバ芋を醸したもろみの入った酒壺が一列に並べられていた。片側の壺は50~70センチメートルほどもある大壺で、もう一方の壺はその半分ほどの大きさしかなかった。前者は本来の客である招待客らをもてなす酒壺で、後者はタバンを持参した者をもてなすためのものであった。従って、この時に開封されたのは、後者の小さな壺の方であった。

酒宴を開始する前に、ティナンドゥック村の村長 Mansang から、タバンを運び込んだシブアヨ村等の一行に対してお礼の言葉が述べられた。そして「エー」という、主催者側とタバンを持参した村人たち両者の賛同の声に続いて、まずタバンを運び込んだ者から一斉に酒を飲み始めた。その傍らでは、主催者側の若者たちがドラを叩いていた。この時点では、招待客らはまだ食事を済ませておらず、そのため酒宴に参加することもなかった。

その後しばらくして、食事を終えた招待客の女たちと主催者側の女たちは、儀礼的な贈与交換であるパキピラン (*pakipiran*) を開始した。パキピラン交換では、主催者側が用意した籐製のかご (*buyung*) に入った米や鶏等の食物が、客たちが持参した金の指輪や腕時計、現金、女性用腰巻き等の衣類と儀礼的に交換される。女性たちは適当なパートナーを探しては、主催者側が用意した食物がなくなるまでパキピラン交換を続けた。パキピラン交換はもっぱら賓客側と主催者側の間で行われ、タバンを持ち寄った者が参加することはなかった¹⁴⁾。

タバンを持ち寄った者が酒盛りを始めて30分ほどした頃、彼らと主催者や共催者(後

述)が一斉に入れ替わって酒を飲み始めた。さらに20分ほどして、今度は先ほど酒を飲まなかったタバンを持ち寄ったメンバーが主催者側の人間と交替して酒を飲み始めた。こうして主催者とタバンを持ち寄った者たちは深夜12時近くまで、代わる代わる交代で酒を飲み続けた。この時、招待客の中には彼らと共に酒を飲むように誘われ、実際に飲み始める者もあったが、この時点では招待客らに用意された大酒壺はまだ開封されていなかった。

②4月17日(第2日目)

深夜0時半頃、客たちに対してコーヒーや紅茶、菓子等が提供された。この後、ようやく招待客用として残されていた大壺が開封されて、酒盛りが再開された。この頃までには大多数の客や主催者たちは既にかんりの酒を飲んで酔っぱらっていた。このためもあってか、大酒壺の開封に当たって特に改まった儀式や挨拶はなかった。

酒盛りが続く中、午前3時過ぎ、賓客側の女たちがビーズ製の飾りであるシンイタン (*sisi'titan*) やプブラック (*pupulak*) を酒壺の上に飾り始めた。これらの飾りは、酒壺の飾りと言われ、その酒壺を用意してくれた主催者ないし共催者への返礼とみなされている。

午前7時過ぎに飲み物と朝食、12時頃に昼食が提供された。

昼過ぎ、再び闘鶏が催された。この日の闘鶏は招待客と主催者たちの間で行われた。なお、バギンパヤンにおける闘鶏では、招待客と主催者ないしタバンを持参した者と主催者の間で闘鶏が戦われ、招待客とタバンを持参した者の間で戦われることはない。

夕方6時半頃、前日同様に、まずタバンを持ち寄った者へ食事が提供された。

その後、引き続き、招待客らに対しても大量の食物や嗜好品が提供された。食物は、小皿93枚分の各種の菓子、ポット42個分およびバケツ(18ℓ入り)19杯分のコーヒーと紅茶、大皿20枚分の肉の炒めもの、飯釜20個分の米飯、鶏8四分のスープ等であった。一方、嗜好品は、紙巻きタバコ19カートン、刻みタバコ19袋、ビール大瓶100本、ウィスキー20本、鯛の缶詰30個、鶏卵60個等であった。

賓客は、提供された食物の中から、好みのものを選び取って各家族が占めているロングハウス回廊の一面に持ち帰ってそれを食べた。食後、前日の正式なもてなしの時と同様に、賓客たちは空になった皿やポット、飯釜等に現金を置いたり挟んだりして返礼をした。

この日の深夜、ロングハウス回廊中央の広場が片付けられ、そこに故 *Anguyung* の遺影を載せた机が運び込まれてきた。遺影が運び込まれると、それまで談笑してい

た故人の娘たちは突然故人を偲んで一斉に泣き始めた。女たちがむせび泣く中、彼女らの夫（従って、故人の義理の息子）である招待客たちは一人ずつその遺影の前に進み出た。そして、衣類やドラ等の故人への贈り物を捧げ持ち、ドラの音にあわせて伝統的な舞踊 (*alang*) を踊りつつ、遺影の前に近寄っていった。招待客が捧げ持っていた贈り物は、遺影の前や横に順次積み上げられた。招待客の中には、自らがドラを叩きながら踊り、そのドラを故人への贈り物とした者もいた。こうして、すべての招待客が代わる代わる踊っていった。この頃には、女性たちの泣き声もおさまり、男たちのおどけた踊りに笑い声さえ漏れるようになっていた。この儀式は、「遺影への踊り (*panalangan ra gambar*)」と呼ばれる。

③ 4月18日 (第3日目)

午前8時頃、賓客たちに朝食が提供された。

10時頃になると、招待客らは自分たちが持ち寄った壺やドラ、各種の衣類などをロングハウス回廊中央部の広場に集め始めた。彼らが集め終わると、その回りに招待客と主催者側の主だった者が集まり、これら「婚資」の贈与 (*antalan*) が行われた。贈与に当たっては、招待客の代表である Dalimpos が、「ドラや壺が少なくして申し訳ないが、これで精一杯だ」と詫びた。これに対し、主催者側の代表としてティナンドックの村長 Mansang が礼を述べるとともに、「とんでもない。こちらこそ肉や酒が少なくして申し訳ない」等と不首尾を詫びた。

10時半過ぎには「婚資」の贈与が滞りなく終了した。主催者側に贈られた壺やドラは、そのまましばらくロングハウス回廊部の中央に陳列されていた。その後、11時頃には、すべての品が儀礼の主催者である Tarisan の個室へと運び込まれた。

午前11時過ぎ、賓客側に昼食が提供された。この時には、昼食への現金等による返礼はされなかった。

12時過ぎ、タバンを持ち寄った者の一部が帰り始めた。帰宅のためロングハウスの回廊を通りすぎる彼らに対して、その両側から主催者側の女性たちがおしろい粉を顔に振りかけた。このおしろいは、バギンパヤン儀礼が終了したことを示すと同時に、客の帰路の安全を祈願するものであるという。ただし、この時点ではバギンパヤン儀礼はまだ終了していなかった。従って、この日の「おしろいかけ」も、都合で先に帰宅する客のために、ごく小規模になされたにすぎない。

夕方、早めの夕食。

深夜、さらに夜食が提供された。

④4月19日(第4日目)

午前8時過ぎ、握り飯とラーメンの遅めの朝食が出される。一部の招待客の間から、飯がひどすぎるといふ不満が漏れ始めた。

10時過ぎ、招待客への「引き出物 (*ininsalahan*)」として、主催者側から米や砂糖等の食物が回廊に運び出されてきた。提供された「引き出物」は、砂糖が2袋(1袋50kg入り)、ビスケットが3缶(1缶18l入り)、米が3袋と9缶、発酵肉が1缶と小壺(1壺10l入り程度)8個分および大壺1個分、牛の生肉が半頭分等であった。また、タバンを持ち寄ったシカラバアン村やシカラボット村、シブアヨ村からの客に対してもそれぞれ盆(1枚当たり約4l)17枚分の米と発酵肉皿18枚分、盆14枚分の米と発酵肉皿14枚分等も提供された¹⁵⁾。

「引き出物」を受け取った賓客たちはそれぞれ、贈られた食物をその場で分配し始めた。招待客らに対する「引き出物」の分配に当たっては、招待客の主だった女たちが主導権を握り、彼らと彼らが同行した同行客全員に均等に行き渡るように慎重に分配を行った。こうして、招待客に対する食物は22口に分けられて、まず招待客の間で分配された。その後、彼らからさらにそれぞれの同行客へと分配された。

午後1時過ぎ、遅めの昼食が提供された。

この頃、主催者である Tarisan の個室では、招待客らから贈られた「婚資」の内、まず衣類が分配され始めていた。衣類は、Tarisan の妻を中心にして、主催者と共催者の家族に分配すべく30口(家族)に分けられていた。1口当たりでは、女性用腰巻き2枚、女性用上着1枚、男性用上着1枚、男性用スラックス1枚が分配されていた。このことから、主催者側が受け取った衣類の総数は、女性用腰巻きが70枚、女性用上着が45枚、男性用上着が45枚、男性用スラックスが44枚、反物の布地が11反以上であったと推定された¹⁶⁾。分配された衣類は、随時、主催者から共催者たちに手渡された。

午後5時頃、衣類を分配し終わった主催者たちは、主催者の Tarisan の台所に保管されていた壺やドラの分配を開始した。主催者である Tarisan, Talimoh, Raikul の三兄弟は、事前に作った共催者のリストを見ながら、各々の儀礼での貢献を考慮しつつ慎重に分配を開始した。というのは、壺やドラは大きさや種類に応じて評価額が異なるため、儀礼後の分配でしばしばもめ事が生じるからである。分配に当たっては、今回のパギンパヤン儀礼でほふられた水牛を提供した共催者の Mansang らに対して特に配慮がなされていた。1時間余りで壺やドラの分配を終えた Tarisan は、共催者たちを一人ずつ台所に呼び寄せて壺やドラを手渡した。Tarisan は手渡す時に、「少なくとも悪いな」などと詫言を入れていた。

この日の午後、招待客やタバンを持ち寄った者の一部が帰宅していった。

夕方、前日同様に夕食が提供され、深夜近くになって夜食が提供された。若者たちはトランプに興じ、大人たちは延々と酒宴を続けていた。

⑤ 4月20日（第5日目）

朝8時過ぎ、主催者側から賓客側への「引き出物」として、再びイノシシの発酵肉がロングハウス回廊中央部に運び出されてきた。賓客側はこれを、既に帰宅した者を除いて、26口（家族）に分配した。この日の「引き出物」に対して、賓客側は1家族当たり1マレーシア・ドルの現金で返礼をした¹⁷⁾。

その後、賓客らは徐々に帰宅し始めた。主催者側の女たちは、帰宅する客が回廊を通り過ぎるたびに、彼らの両側からおしろい粉を頭から振りかけたり、ポマードや口紅を顔に塗りたい。賓客らもこれに応酬し、招待客や同行客、主催者、共催者、手伝いらが入り交じってしばらく大騒ぎが続いた。既に述べたように、これはバギンパヤン儀礼の終了を象徴する行為である。

午前10時頃、タバンを持ち寄ったシカラバアン村の者が帰宅の途についた。興奮した主催者や招待客らはロングハウスの外にまで降り、踊りながらタガル河を下り始めた彼らのボートを見送った。

午前10時過ぎ、遅めの朝食が提供された。この後、ほとんどの賓客は三々五々、それぞれの村に帰っていった。

以上で、ティナンドゥック村で開催された、故 Anguyung を弔う5日4晩にわたるバギンパヤン儀礼は終了した。さて、以下では、このバギンパヤン儀礼の主催者側と賓客側双方の参加者の間の社会関係を検討してみたい。

4. 儀礼の参加者

バギンパヤン儀礼への参加者は、儀礼を開催する主催者側と、その儀礼に客として参加する賓客側に2分することができる。主催者側は自分たちのロングハウスで儀礼を開催して賓客側を接待することから、「家に住む者 (*amahun*)」あるいは「酒を振る舞う者 (*antapai*)」と呼ばれる。一方、賓客たちは「祭宴に参加する者 (*tambului*)」と呼ばれる。

バギンパヤン儀礼等の大規模の儀礼では、多数の賓客を大量の食物や嗜好品等で数

日間にわたってもてなさなければならない。そのため、主催者側には、食物を持ち寄ったり調理や接待を手助けする者が多数参加する。同様に、賓客側にも、故人の「娘の夫」や「姉妹の夫」たちという本来の招待客ばかりでなく、彼らが誘ってきた同行客や、援助物資であるタバンを持ち寄ってきた者たちが多数含まれている。

そこで、以下ではまず、主催者側と賓客側に分けて儀礼への参加者を明らかにしておきたい。

1) 主催者側

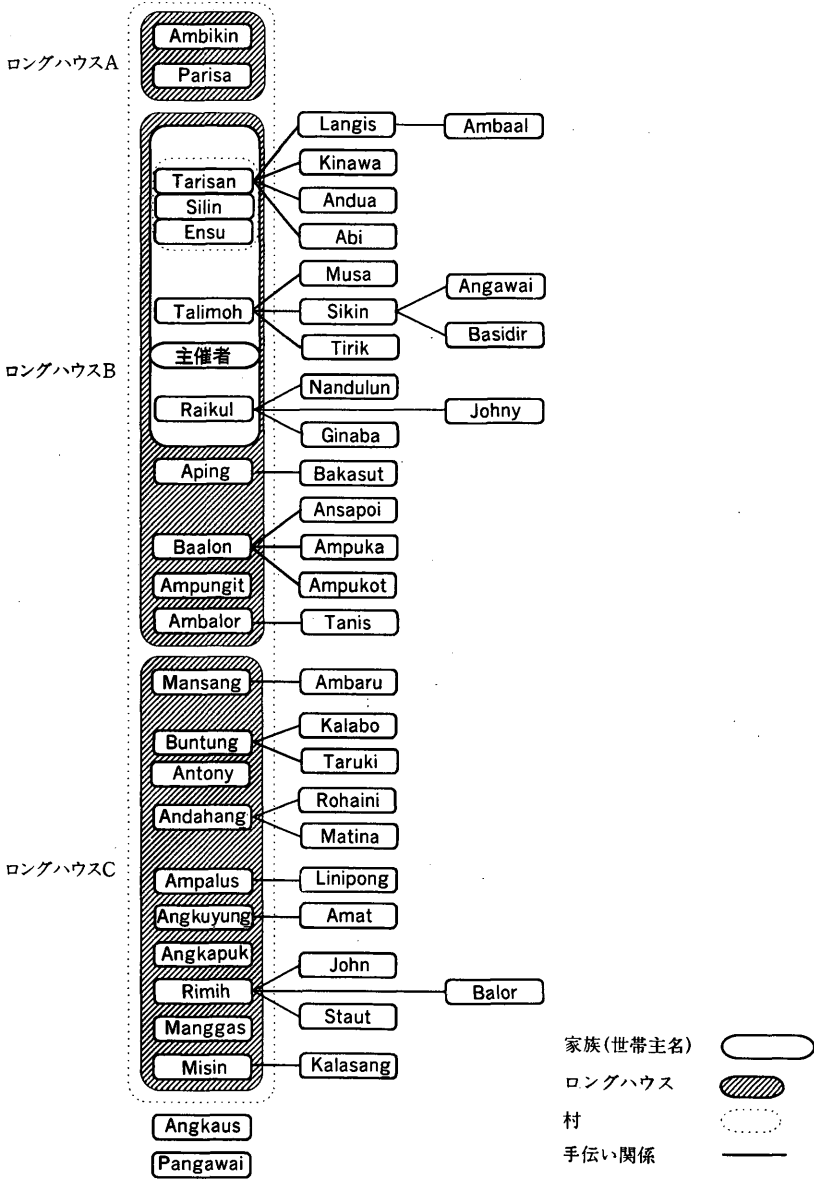
主催者側の参加者は、儀礼の主催者（喪主）と共催者、及び彼らの手伝いに分けられる¹⁸⁾。

バギンパヤン儀礼をはじめとする各種の大規模な儀礼では、1家族ないし数家族が儀礼を主催する「主催者 (*tampuunon*; 主要な者)」となり、彼らと数家族～十数家族の「共催者 (*suma'ang puun*; 主要な手伝い)」が協力して儀礼を開催する。主催者ないし共催者はそれぞれ、ロングハウスの酒宴の場に一列に並べられた大壺入りの酒を提供することで象徴される。米ないしキャッサバ芋を醸したもろみを入れた、高さ70～80センチメートルの大壺は、いずれも主催者や共催者たちの自慢の大壺で、婚資ないし財産としてマルチ社会ではきわめて重要視されている。主催者や共催者は、1口ないしそれ以上の大壺入りの酒を提供するばかりでなく、酒の肴や食事、嗜好品等、賓客のもてなしすべてに責任を持たねばならない。従って、マルチ社会で各種儀礼に主催者ないし共催者として参加することは、既に結婚して農耕や漁撈・狩猟活動において完全に独立した家族であることを前提とする¹⁹⁾。主催者や共催者はまた、儀礼中に催される闘鶏や儀礼的な贈与交換等のさまざまな儀礼的行為を行う。

主催者や共催者はそれぞれ、通常、数家族の「手伝い (*suma'ang*)」の協力を得て賓客の接待に当たる。もてなすべき賓客が多数に上るためである。手伝いは、主催者や共催者に協力して調理や接待の手助けをするばかりでなく、賓客に提供する食物の一部をも持ち寄る。にもかかわらず、彼らが持ち寄った食物はあくまでも主催者ないし共催者の名前で提供される。手伝いはまた、闘鶏や儀礼的な贈与交換に参加する。しかしこの場合にも、主催者ないし共催者の名前で参加し、手伝いが彼ら自身の名前で参加することはない。

さて、今回のバギンパヤン儀礼の場合には、主催者（喪主）は故 *Anguyung* の3人の息子、すなわち *Tarisan*, *Talimoh*, *Raikul* であった (図2及び図3参照)。彼らは皆、既婚者である。故人の妻である *Ambilus* も主催者とみなすことができる。し

ティナンドウック村



共催者 手伝い 手伝い
 図2 パギンパヤン儀礼の主催者・共催者と手伝い

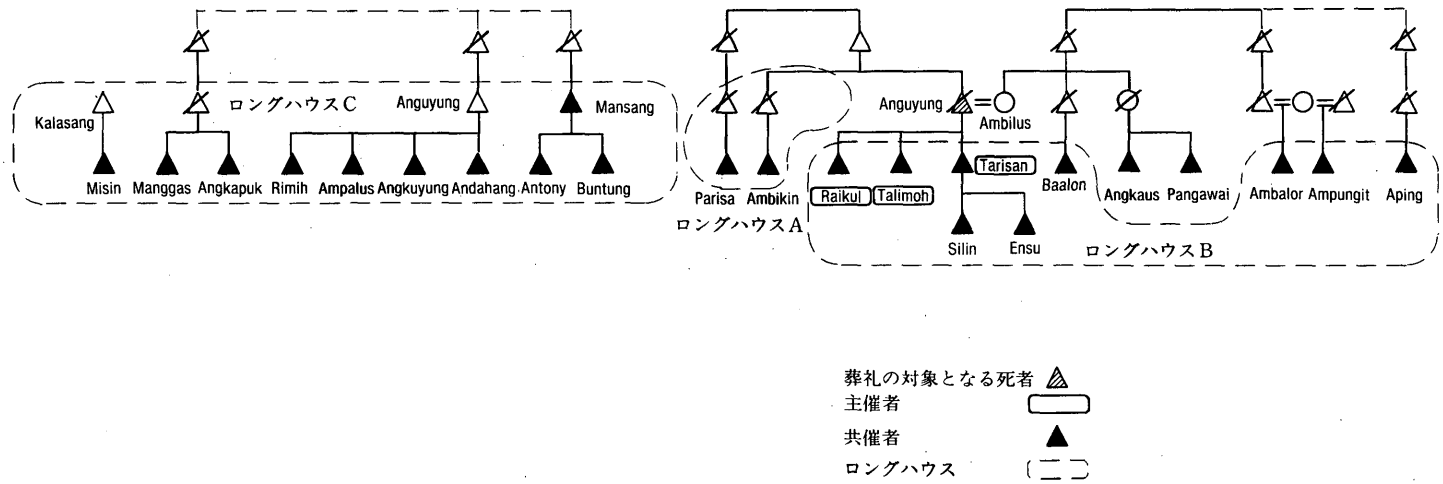


図3 主催者側の親族関係

かしながら、年老いた彼女が単独で儀礼の酒食を準備することはなかったし、儀礼全体を主導することもなかった。彼女に代わって儀礼のいっさいを取り仕切っていたのは、故人の長男の **Tarisan** であった。このためもあってか、通常は共催者となり得ない **Tarisan** の 2 人の息子 (**Silin** と **Ensu**) も、今回は例外的に共催者として儀礼に参加していた²⁰⁾。主催者は皆、故 **Anguyung** と同じロングハウス **B** に住んでいた。

これに対し、共催者は、ティナンドゥック村のロングハウス **A**, **B**, **C** のいずれかに個室を有する家族であった (図 1, 図 2 及び図 3 参照)。すなわち、ロングハウス **A** からは **Ambikin** ら 2 家族、ロングハウス **B** からは **Aping** ら 4 家族と主催者 **Tarisan** の 2 人の息子たち、ロングハウス **C** からはティナンドゥック村の村長 **Mansang** らを初めとする 10 家族が参加していた。さらに、ティナンドゥック村以外のロングハウスから **Angkaus** ら 2 家族が参加していた。以上、合計 20 家族が共催者として今回のパギンパヤン儀礼に参加していた。

ところで、既に述べたように、主催者や共催者はふつう各々が複数の手伝いをとまって儀礼に参加している。今回のパギンパヤン儀礼においても、主催者や共催者はそれぞれたいてい複数の手伝いをとまっていた (図 2 参照)。例えば、主催者の **Tarisan** (及び彼の息子で共催者の **Silin** や **Ensu**) の場合には、**Langis** や **Kinawa** ら 5 家族が手伝いにやってきていた。同様に、主催者である **Talimoh**, **Raikul** 兄弟にもそれぞれ 5 家族、3 家族の手伝いが協力していた。また、共催者である **Baalon** や **Ambalor**, **Mansang**, **Buntung**, **Rimih** らにも、1～3 家族の手伝いが見られる。

手伝いの中には、彼ら自身がさらに手伝いを伴って来ていることもあった。例えば、主催者 **Tarisan** の手伝いである **Langis** は **Ambaal** を彼の手伝いとして伴って儀礼に参加していた。また、主催者 **Talimoh** の手伝い **Sikin** にいたっては、**Angawai** と **Basidir** の 2 家族を手伝いとして儀礼に同伴していた。

今回のパギンパヤン儀礼全体では、主催者ないし共催者の直接の手伝いとして 26 家族が儀礼に参加し、手伝いの手伝いとして 3 家族が参加していた。

以上をまとめると、主催者側においては、主催者が 3 家族、共催者が 20 家族、主催者ないし共催者の手伝いが 26 家族、手伝いの手伝いが 3 家族、合計 52 家族以上が今回のパギンパヤン儀礼に参加していたということが出来る。子どもたちを含めると、300 人以上にも上る多数の者が、主催者や共催者、手伝いとして儀礼に参加していたものと推定される²¹⁾。

2) 賓客側

主催者側と同様に、賓客側の参加者も本来の客である招待客や同行客、タバン（援助物資）を持ち寄った客に分類することができる。

バギンパヤン儀礼において主催者側が招待した本来の客である招待客は、トゥマキンと一括される。トゥマキン (*tumakin*) の本来（狭義）の意味は「娘の夫」である。しかし、後に詳しく検討するように、バギンパヤン儀礼等の文脈で使われるトゥマキンという言葉は、ただ単に系譜上の「娘の夫」だけを意味するものではない。この語は、広義には、同一のロングハウスに住む、父系に偏った親族集団としての「われわれ」の「娘の夫」をすべて含む。従って、例えば、系譜上の「姉妹の夫」や「イトコの夫」、「メイの夫」等はすべて、「われわれの娘の夫（トゥマキン） (*tumakin mai*)」と呼ばれる。これに対して、「妻の親」（イワン；*iwan*）も広義には系譜上の「妻の親」のほかに、妻方の年長の親族を広範囲に意味する。

葬礼において、トゥマキンは死者の遺体を納める棺の調達や遺体の埋葬、墓の造営等に分担して責任を持つべきものとみなされている。これらのサービスに対して、「妻の親」たちはトゥマキンをバギンパヤン儀礼等に招待し、酒食でもてなす。彼らトゥマキンが、今回の一連の葬礼（埋葬、忌み明けの儀礼、バギンパヤン儀礼等）の招待客である（図4参照）。なお、各トゥマキンの、埋葬や葬礼等への参加状況は表1に示した通りである（表1参照）。

バギンパヤン儀礼で招待されたのは、故 *Anguyung* の直接のトゥマキン（狭義のトゥマキン）だけではない。故 *Anguyung* の息子たち（主催者）のトゥマキンや、ロングハウス B、さらにはティナンドゥック村の儀礼共催者のトゥマキンたちが広く招待された。主催者ないし共催者によるトゥマキンの招待関係は、図4に矢印で示してある。例えば、*Amihang* や *Eson, Bokol* らは、故 *Anguyung* の直接のトゥマキンとして招待されている。一方、*Kukumon* や *Angkawot, Akal S.* らは、共催者の *Baalon* が招待した彼のトゥマキンである。同様に、共催者の *Ambikin* や *Angkuyung* もそれぞれ、彼らのトゥマキンである *Lindas, Umin* と *Elik* らを招待している。かくして、今回のバギンパヤン儀礼において、主催者ないし共催者のトゥマキンとして招待されたのは23家族にものぼった。

ところで、トゥマキンたち招待客は故人の遺体を埋葬したり墓を造営するだけではない。彼らは故人（そしてまたその遺族）に対する最後の「婚資」として、壺やドラ等のさまざまな威信財を儀礼において贈与する。彼らはまた、主催者側が提供した酒

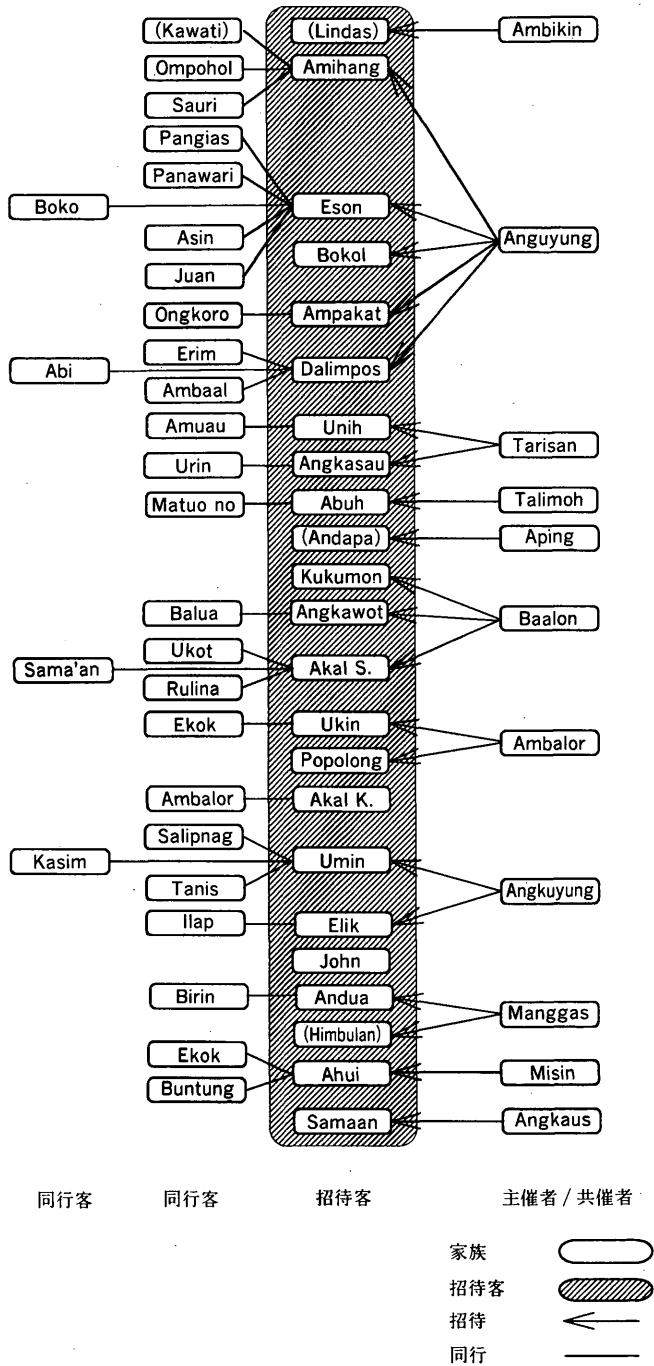


図4 バギンバヤン儀礼の招待客と同行客

表1 トゥマキンの葬礼等への参加状況

儀礼等の名称 名前	棺の製作	墓穴掘り	埋葬	忌み明けの 儀礼	墓の柵作り	バギンバヤン 儀礼
Ahui	×	○	○	×	×	○
Akal S.	○	○	○	○	×	○
Akal K.	×	○	○	×	×	○
Amihang	○	○	○	○	×	○
Kawati	○	○	○	×	×	×
Ampakat	○	○	○	×	×	○
Andua	○	○	○	×	×	○
Angkasau	×	×	×	×	×	○
Angkawot	○	○	○	○	×	○
Balua	○	○	○	○	×	○
Bokol	×	×	×	○	×	○
Jamil	×	○	×	○	○	○
Popolong	○	○	○	○	×	○
Dalimpos	○	○	○	○	○	○
Eson	○	○	○	○	○	○
Himbulan	○	○	○	×	×	×
Kukumon	○	○	○	○	○	○
John	×	○	×	×	×	○
Lindas	×	○	×	×	×	×
Ukin	○	○	○	○	○	○
Unih	○	○	○	○	○	○
Umin	○	○	○	×	×	○
Elik	×	×	×	△(妻参加)	×	○
Abuh	×	×	×	×	×	○
Andapa	×	○	○	○	×	×
Samaan	×	×	×	×	×	○

食に対しても現金や女性用腰巻き等で返礼をしなければならない。こうした婚資や返礼として贈与する大量の威信財や多額の現金を調達したり準備するため、招待客たちは通常、各自自分たちのトゥマキンを儀礼に誘う（特に、*indulu* ないし *injuul* と言

われる)。こうした、招待客に儀礼への参加を誘われた客が同行客である。

同行客に対する誘いはあくまで誘いであって、決して強制ではない。しかし、誘いを断ることは、その後の食物と婚資の贈与交換関係を断つことを意味し、ひいてはイワントゥマキンという義理の親子関係ないし姻族関係を損ねることになる。従って、通常、トゥマキンが「妻の親」たちの儀礼への参加の誘いを断ることはまずない。

今回のバギンバヤン儀礼を見てみると、例えば、招待客の Amihang は、彼のトゥマキンである Ompohol や Sauri らを同行している（図4参照）。同様に、招待客の Eson は、彼のトゥマキンである Pangias や Panawari ら5家族を同行して儀礼に参加している。このように、各トゥマキンはたいてい複数の自分たちのトゥマキンを同行して儀礼に参加している。結局、今回のバギンバヤン儀礼では、招待客たちは合計28家族（直接参加しなかった1家族を含めて29家族）の同行客を連れて儀礼に参加していた。

賓客側には、招待客や彼らの同行客のほか、食物や薪等の援助であるタバンを持ち寄ってそのまま儀礼に参加した家族も含まれる。彼らは「タバンを持ち寄る人（*ulun tumabang*）」と呼ばれ、儀礼の本来の客である招待客や彼らの同行客とは明確に区別されている。彼らは、招待客や同行客とともに儀礼に客として参加している。しかし、儀礼会場であるロングハウス回廊においては、招待客らとは異なった場所を占めて寝泊まりする。また、彼らに提供される食物の種類や量、提供される時期も、本来の客とは微妙に異なっている。彼らは壺やドラのような婚資を携えてくるようなことはないし、儀礼終了時に「引き出物」として大量の食物を主催者側から提供されることもない。また、バキピラン交換をはじめとする儀礼的な贈与交換に参加することもない²²⁾。

今回バギンバヤン儀礼にタバンを持ち寄ってそのまま客としてティナンドゥック村に残ったのは、シブアヨ村からの13家族、シカラボット村からの4家族、シカラバアン村からの数家族で、合計20家族ほどであった。

以上をまとめると、賓客側では、招待客としてのトゥマキンが23家族、彼らが同行してきた同行客が28家族、タバンを持ち寄った客が約20数家族、合計70家族以上、子ども達を含めて420人以上の客が儀礼に参加したものと推測される²³⁾。

従って、5日4晩にわたるバギンバヤン儀礼全体では、主催者側と賓客側の参加者を合計すると全部で122家族、700人近くが今回の儀礼に参加していたことになる。

5. 食物と婚資の調達

1) 食物の調達

バギンパヤン儀礼をはじめとする各種儀礼において消費される主要な食物は、米やキャッサバ芋で醸した酒、主食としての米やタピオカ（キャッサバ澱粉）、そして副食物としてのイノシシやシカ、水牛、牛等の発酵肉や新鮮な肉である。ムルット社会では、この中でも特に肉の調達にもっとも時間とエネルギーが注がれる。

儀礼の開催が最終的に決定されるのは、主要作物である稲が実り始める1月半ば頃である。豊作が期待されてはじめて儀礼の開催が決定されるのであるから、十分な米の確保にはふつう問題がない。また、キャッサバはたいてい余分なほどに作付けされている上に、収穫の時期を問わないので不足することはない。これに対して、イノシシやシカの肉、川魚等の副食物は必ずしも十分に得られるとは限らない。しかも、それらは儀礼における酒宴の酒の肴やおかずとしてなくてはならない。そこで、主催者側では、儀礼の開催を決定して以降、頻繁に狩りや魚採りを繰り返して肉や魚の確保に努める。得られた肉や魚は、保存が効くようにたいていは発酵肉（*tamba'*）に加工する。

表2に示したのは、今回のバギンパヤン儀礼等に備えて、主催者ないし共催者が行った狩猟ないし漁撈活動の一部のリストである（表2参照）。これらの狩猟や漁撈は日々の副食物を得るためでもあったが、獲物の多くは発酵肉として儀礼用に保存したという。そして、その大半は実際に今回のバギンパヤン儀礼の際に消費された。

主催者側では、主催者である Tarisan や Talimoh, Raikul が中心となって、狩りや魚採りを行っていた。例えば、Talimoh は、儀礼開催日の半月ほど前の4月初旬に、シカ、ホエジカをそれぞれ1頭得て発酵肉をつくっている。また、20代半ばの Raikul の場合には、儀礼の10日ほど前から4回漁に出て、1缶（18ℓ入り）分の発酵魚を用意した。

一方、主催者の一人である Tarisan は狩りにも漁にも出かけなかった。その代わりに、儀礼開催日直前の4月半ばに、手持ちの水牛と交換してイノシシとシカの発酵肉10缶を調達している²⁴⁾。

主催者側ではまた、主催者を中心として、儀礼用に水牛や牛、豚も調達している。主催者の Tarisan, Talimoh, Raikul 兄弟はそれぞれ水牛を1頭ずつ購入した。彼らは

表2 パギンパヤン儀礼直前の狩猟と漁撈活動

リーダーの名前	回数	期日	儀礼用に用意した肉 ないし魚	その他
Tarisan	0	4月9日	イノシシ及びシカの発酵肉10缶	水牛1頭と交換
Talimoh	1	4月初旬	シカ1頭, ホエジカ1頭	
Raikul	4	4月7~15日	川魚の発酵肉1缶	
Baalon	1	4月14日	イノシシ3頭	
Ampalus	1	4月初旬	大ナマズ7匹など	
Parisa	1	4月初旬	川魚の発酵肉1缶	
Ambalor	2	3月下旬	イノシシ3頭, マメジカ1頭	
Angkuyung	2	4月初旬	イノシシ1頭, マメジカ2頭	Angakapuk 同行
Mansang	1	4月初旬		Angakapuk, Anthony 同行
Rimih	3	4月初旬	ホエジカ1頭など, 川魚の発酵肉3缶	1回は Angkapuk 同行
Angkapuk	4	4月初旬	イノシシ1頭	1回は Rimih, 2回は Angkuyung, 1回は Mansang らを同行

また、3人で費用を分担して牛1頭も購入した。さらに、Tarisanは共催者であるBaalonら4人と協力して水牛1頭を購入した。一方、共催者である村長のMansangらも水牛1頭と豚1頭を儀礼用に購入した²⁵⁾。

今回のパギンパヤン儀礼に関して、主催者側における食物の調達状況を示したものが表3である(表3参照)。表3から明らかなように、米やタピオカ、発酵肉等、主要な食物の多くは主催者と共催者が自前で準備している。しかし、彼らとともに、主催者や共催者の手伝いも儀礼で消費された食物の一部の調達に寄与していた。例えば、主催者のTarisanの元へは、Abi, Andua, Borot, Ambaalの4家族の手伝いが、米や発酵肉、砂糖、ビスケット等の食物を持ち寄っていた。また、共催者であるRimihの場合には、BalorやJohn, Stautの3家族の手伝いが発酵肉ばかりでなく、酒や米等の主要な食物も持ち寄っていた。

表4ではさらに、パギンパヤン儀礼に先だって開催された、埋葬と忌み明けの儀礼における食物の調達の状況を示してある(表4参照)。というのは、本来はパギンパヤン儀礼へも参集すべきであったが、仕事などの都合で参加しなかったという例が少なからずあるからである。両儀礼における食物の調達を総合的に分析すると、主催者

表3 主催者側における食物の調達 (バギンバヤン儀礼)

	酒 (壺)	米	タピオカ (バケツ)	発酵肉	砂糖	ビスケット	タバコ (カートン)	その他
Ambikin	—	—	—	—	—	—	—	断食中で不参加
Parisa	3	4 缶	4 bkt***	2 缶	1 缶	1 缶	1	
Tarisan	10	9 缶	5	10缶, 1壺	1袋, 2缶	4 缶	6	水牛 2 不参加
Kinawa	—	—	—	—	—	—	—	
Abi	1	1袋, 1缶	2	1 壺	1 缶	1 缶	2	
Andua	0	1 缶	1	0	1 缶	1 缶	0	
Borot	0	1 gtg*	1	1 壺	4 小袋	2 中袋	0	刻みタバコ 4袋
Ambaal	0	1 缶	2	4 tnk****	0	0	0	
Talimoh	4	5 缶	3	3 壺	1.5缶	2 缶	2	小麦粉 20kg
Angawai	0	2 缶	2	3 tnk	0	0	1	
Sikin	0	0	2	2 缶	0	1 缶	0	
Musa	0	1 缶	1	1 壺	0	0	0	
Basidir	0	1 byg**	1bkt	2 壺	0	0	0	
Raikul	2	3 缶	1	0	1 缶	1 缶	1	水牛 1
Nandulun	0	4 缶	1 bkt	5 壺	2 缶	1 缶	1	
Johny								
Ginaba								
Aping	5	4 缶	4	4 缶	1 缶	1 缶	2	
Bakasut	0	1 缶	1	1 壺	0	M\$ 5 相当	5 箱	
Baalon	6	5	4	3 缶	2	2	2	
Ansapoi	2	4	5	5 缶	1	1	1	
Ampukot								
Ampungit	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Ambalor	12	6 缶	7 bkt	5 壺	2 缶	1 缶	2	
Mansang	4	4 缶	3	6 缶	1 缶	1 缶	3	水牛 1, 豚 1
Ambaru	0	2 缶	1	1 壺	0	0	0	
Buntung	2	4	2	0	0	0	0	
Karabo	1	0	1	2 壺	0	0	0	
Taruki								
Antony	2	2.5缶	2	1 壺	1 gtg	M\$ 6 相当	1	
Andahang	3	4 缶	1	1 壺	1 缶	1 缶	1	
Andapa	0	0	2	1 壺	0	0	0	薪 5 束
Ampalus	4	6 缶	2	3 壺	3 缶	3 缶	2	小麦粉 2 缶
Linipong	0	1 缶	0	0	0	0	0	
Angkuyung	4	4 缶	2 bkt	2 壺	2 缶	1 缶	3	
Amat	0	1 缶	1 bkt	1 壺	0	0	0	
Angkapuk	2	3 缶	3	2 壺	1 缶	1 缶	5 箱	
Rimih	4	6	1	3 壺	1 缶	2 缶	2	
Balor	0	1	1	1 壺	0	0	0	
John	1	1	0	1 壺	0	0	0	
Staut	0	1	1	1 壺	0	0	0	
Manggas	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Misin	3	6 缶	2	2 缶	0.5缶	M\$ 8 相当	2	

*gtg: gantang(約4.5 l)

**byg: buyung(籐製かご, 約4.5 l 入り)

***bkt: bangkat(竹製かご, 約18 l 入り)

****tnk: tungku(竹筒製容器, 約4.5 l 入り)

1 缶 (18 l 入り), 1 バケツ (18 l 入り), 1 袋 (砂糖, 米等は 50 kg 入り)

表4 主催者側における食物の調達（忌み明けの儀礼）*

	酒 (壺)	米	タビオカ (バケツ)	発酵肉	砂糖	ビスケット	タバコ (カートン)	その他
Ambikin	2	1 缶	1	1 缶	0	0	0	水牛 1
Parisa	2	1 缶	2	1 缶	1 缶	1 缶	1	
Tarisan	20	6 缶	10	6 壺	2 缶	2 缶	?	水牛 1
Kinawa	5	1 缶	4	3 壺	1 缶	1 缶	1	
Abi	1	1 缶	1	1 壺	M\$10分	0	0	
Andua	1	1 缶	1	1 壺	0	0	0	
Borot	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Ambaal	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Talimoh	10	20 kg	3	3 壺	1 缶	1 缶	1	
Angawai	0	1 缶	1	1 壺	0	0	0	
Sikin	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Musa	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Basidir	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Raikul	4	3 缶	2 bkt	3 缶	1 缶	M\$ 5 分	2	
Nandulun	1	1 缶	1 bkt	1 缶	0	0	0	
Johny	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Ginaba	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Aping	5	3 缶	2 bkt	3 壺	1 缶	0.5 缶	2	不参加
Bakasut	—	—	—	—	—	—	—	
Baalon	3	3 缶	2	2 缶	1 缶	1 缶	2	
Ansapoi	2	2 缶	1	1 壺	0	0	0	
Ampukot	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Ampungit	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Ambalor	4	1 缶	1 bkt	1 缶	2 gtg	2 小袋	1	
Mansang	4	2 缶	2	1 缶	0.5 缶	M\$10分	2	
Ambaru	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Buntung	2	1 缶	1	1 壺	M\$15分	M\$10分	1	
Karabo	1	1 缶	1	1 壺	0	0	0	
Taruki	—	—	—	—	—	—	—	
Antony	4	2 缶	2	1 缶	1 缶	M\$ 6 分	2	
Andahang	1	1 缶	1 bkt	1 缶	1 缶	1 缶	1	
Andapa	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Ampalus	2	1 缶	0	1 壺	1 缶	1 缶	2	
Linipong	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Angkuyung	3	4 缶	2 bkt	1 壺	1 缶	1 缶	2	
Amat	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Angkapuk	1	1 缶	1	1 壺	M\$10分	M\$ 4 分	5 箱	
Rimih	2	2 缶	3	2 缶	1 缶	1 缶	1	
Balor	—	—	—	—	—	—	—	不参加
John	1	3 缶	0	1 壺	0	0	0	
Staut	—	—	—	—	—	—	—	不参加
Manggas	?	?	?	?	?	?	?	資料得られず
Misin	1	6 gtg	2	?	?	?	?	父の Kalasang 参加

*単位については表3参照

や共催者全19家族の内の11家族（57.9パーセント）に対して、手伝いが食物等を持参していたことがわかる²⁶⁾。しかも、主催者の Tarisan や Talimoh、共催者の Baalon の場合のように、複数の手伝いが食物を持参している例が多い。

主催者側における食物や嗜好品の調達は、主催者や共催者、手伝いによるだけではない。パギンパヤン儀礼における食物の調達で特徴的なことは、相互扶助関係にある近隣ないし遠方の村（ロングハウス）からタバンと称される食物の援助がなされることである。既に述べたように、今回のパギンパヤン儀礼では、シブアヨ村、シカラボット村、シカラバアン村の3つの村から食物が運び込まれてきた。シブアヨ村とシカラボット村は協力して酒を20壺分、米を籾製のかご（*buyung*、約10l入り）16杯分、米飯をインダンガン（*indangan*）と呼ばれる舟形の飾り容器（全長約3m）1杯分等として持ち寄った（表5参照）。また、シカラバアン村からは酒10壺分、米10缶分のほかに、砂糖（50kg入り）1袋、薪250束等が運び込まれてきた。埋葬・忌み明けの儀礼においても、量は多くはなかったがタバンが上記の3つの村から届けられていた（表6参照）。

シブアヨ村はシカラボット村の移住者によって創立されたこともあって、両村は協

表5 タバンとしての食物等の調達（パギンパヤン儀礼）*

ロングハウス (村)名	酒(壺)	米	タピオカ	発酵肉	その他
シカラボット シブアヨ	20	16byg 1 <i>indangan</i> 入り飯	8バケツ 3 bkt	5 tnk 1壺	鯛缶詰17個 (<i>indangan</i> の飾り)
シカラバアン	10	10缶	0	0	砂糖50kg ビスケット3缶 タバコ3カートン 鯛缶詰40個 薪250束

*単位については表3参照

表6 タバンとしての食物等の調達（忌み明けの儀礼）*

ロングハウス (村)名	酒(壺)	発酵肉	その他
シカラボット	5	1壺	イノシシ肉1頭分
シブアヨ	2	2 tnk	イノシシ肉1頭分
シカラバアン	0	0	

*単位については表3参照

力して食物や薪を運んできた。ただし、後述するように、両村は別個に今回バギンパン儀礼を開催したティナンドゥック村と相互扶助関係を結んでいた。

タバンとして運ばれてきた援助品は、まず主催者である Tarisan らが代表として受け取った。しかし、主催者らが個人的にそれを消費したり調理をして賓客側に提供する訳ではない。タバンは、主催者や共催者の間で一度分配された上で、彼らがそれぞれ別個に調理して賓客側に提供した。

タバンとしての食物等は、主催者らが中心となって、ティナンドゥック村の3つのロングハウスの間で、それぞれのロングハウスの家族数を考慮しながら大まかに分配した(表7参照)。ただし、儀礼に参加した主催者や共催者の家族に均等に行き渡るようにするため、米や砂糖、缶詰、薪等のすべてのものが事前に慎重に計量ないし計数され、記録される。これはまた、後述するように、タバンはいずれその内「返済」しなければならないからでもある。タバンの分配を受けた各ロングハウスでは、それをさらに家族ごとにはほぼ均等に分配していった。こうして、タバンは、儀礼へ主催者ないし共催者として参加した全家族へ均等に分配され、各家族ごとに調理された上で初めて賓客側に提供された。

さて、以上のような経過を経て主催者側が調達した食物や嗜好品等を、主催者と共催者、手伝い、タバンに分けて示したものが表8である(表8参照)。

今回の5日4晩にわたるバギンパン儀礼全体では、酒が107壺分消費されている。また、主食として米約980kg、タピオカがバケツ(18l入り)約84杯分、副食として牛1頭と水牛5頭分の肉、豚1頭分の肉、発酵肉一斗缶(18l入り)約70缶分等が消費された。その他、嗜好品や菓子として、砂糖約260kg、ビスケット一斗缶34缶分、タバコ43カートン等も消費された。

表7 タバンとして調達した食物等の分配*

	シカラボット・シブアヨ村からの食物					シカラバアン村からの食物						
	酒(壺)	米(缶)	タピオカ	発酵肉	缶詰(缶)	酒(壺)	米(缶)	砂糖	ビスケット(缶)	缶詰(缶)	コーヒー(小袋)	タバコ(カートン)
ロングハウスA	2	3	2バケツ 1 bkt	2 tnk	3	0	1	0	1	5	5	1
ロングハウスB	10	7	3バケツ 1 bkt	1壺 1 tnk	8	5	4	1袋 (20kg)	1	15	10	1
ロングハウスC	8	6	3バケツ 1 bkt	2 tnk	6	5	5	0	1	20	15	1

*単位については表3参照

表8 主催者側における食物の調達*

	酒(壺)	米	タビオカ	発酵肉	砂糖	ビスケット	タバコ	その他
主催者及び共催者	72	79.5 缶	17 bkt 32 パケツ	31 缶 22 壺	1 袋 22 缶 1 gtg M\$30分	23 缶 M\$29分	35 カートン 5 袋(刻み タバコ)	牛 1 頭 水牛 5 頭 豚 1 頭
手伝い	5	1 袋 26 缶 1 gtg 1 籐製かご	3 bkt 21 パケツ	7 缶 18 壺 7 tnk	5 缶 4 小袋	5 缶 M\$ 5 分	5 カートン 9 袋(刻み タバコ)	
タバン	30	10 缶 16 byg 1 indangan	3 bkt 8 パケツ	1 壺 5 tnk	1 袋	3 缶	3 カートン	薪250束
合計	107 壺	約49袋	約84パケツ	約70缶	約13袋	約34缶	43カートン 14袋(刻み タバコ)	

*単位については表3参照

ここで、さらに酒や食物等の調達の経路を、主催者や共催者、手伝い等に分けて検討してみたい。

表8から明らかなように、儀礼で消費された107壺分の酒の内、72壺(67.3パーセント)は主催者や共催者が調達している。これに対して、手伝いが5壺(4.7パーセント)を持ち寄り、タバンとして30壺(28.0パーセント)が調達されている。

米について見ると、消費した米(20kg入り)約49袋の内、主催者と共催者が約32袋(65.3パーセント)、手伝いが約12袋(24.5パーセント)を準備し、タバンとして約5袋(10.2パーセント)が調達されていた。タビオカでは、全消費量パケツ84杯分の内、主催者と共催者が49杯分(58.3パーセント)、手伝いが24杯分(28.6パーセント)を賄い、11杯分(13.1パーセント)をタバンとして調達している。さらに発酵肉についてみると、主催者と共催者、手伝いがそれぞれ46缶(65.7パーセント)と22缶(31.4パーセント)を調達し、残りの2缶(2.9パーセント)はタバンとして調達されていた。

以上をまとめると、主催者側で用意した食物や嗜好品の多くは主催者や共催者が個別に調達しているものの、手伝いが持参したり、タバンとして調達されたものも多いことがわかる。特に、米やタビオカ、発酵肉については、その3割近くは手伝いが持参したものであった。また、酒や米、薪などもかなりの量がタバンとして調達されている。

2) 婚資の調達

主催者側における食物等の調達におけるのと同じように、賓客側における壺やドラ等の婚資の調達も、本来の客である招待客（トゥマキン）だけによるものではない。彼らが誘った同行客も調達に貢献している。

バギンパヤン儀礼では、招待客の Dalimpos が Ambaal と Erim の 2 人の同行客を誘ってきていたことは既に述べた（図 4 参照）。婚資の調達という観点から検討すると、Dalimpos 自身はカライ（*karai*）壺等の 3 個の壺とグロック（*gulok*）ドラ 1 個、反物の布地 1 反（100 m）、250 マレーシア・ドルの現金等を儀礼用に持参していた（表 9 参照）。一方、彼の同行客である Ambaal はカライ壺 1 個、女性用腰巻き 3 枚、25 マレーシア・ドルの現金等を、Erim はカライ壺 1 個、女性用腰巻き 2 枚、30 マレーシア・ドルの現金等を持参して儀礼に参加していた。

また、招待客の Popolong の場合には、彼自身が持参したのは衣類数枚と 100 マレーシア・ドルにすぎなかったが、彼の同行客 2 人（Samini と Taing）が合計 3 個の壺を持参していた。

さて、以上のようなバギンパヤン儀礼における賓客側の壺やドラ等の調達を、本来の客である招待客（トゥマキン）と同行客に分けてまとめて示したのが表 9 である（表 9 参照）。また、表 10 では、埋葬及び忌み明けの儀礼における同様の資料を示している（表 10 参照）。

表 9 からわかるように、今回のバギンパヤン儀礼全体では、合計 40 個の壺と 13 個のドラ、11 反の布地、約 3500 マレーシア・ドルなどが、招待客側からの「婚資」等として持ち寄られている。また、埋葬及び忌み明けの儀礼では、合計 31 個の壺と 8 個のドラ等が持ち寄られている。そして、いずれの場合にも、ビヌクル（*Binukul*）壺等の高価な壺やドラ、多額の現金等は主に、招待客としてのトゥマキン自らが持参していることがわかる。

これに対して、同行客は主催者側に贈与された壺 40 個の内、11 個（27.5 パーセント）を持ち寄っている。同様に、ドラ 13 個の内 4 個（30.8 パーセント）、ビーズ製飾りシシタン（*sisi'itan*）58 連の内 12 連（20.7 パーセント）等も同行客が持参している。しかしながら、壺やドラ等の主要な婚資は、彼ら同行客の名前で主催者側に贈与されるわけではない。それらはすべて、儀礼の最後にロングハウスの回廊中央部に集められ、彼らを誘った招待客の名前で主催者に贈与される。

表9 賓客側における婚資の調達 (バギンパヤン儀礼)

名前	壺の種類と個数	ドラの種類と個数	反物,衣類	ビーズ飾り(連)	現金(M\$)	その他
Ampakat Ongkoro	カライ2 カライ1	トゥンバガ1 0	反物1 0	3 0	200 50	耳飾り1,腕時計1
Amihang Ompohol Sauri	テノム1 0	0 トゥンバガ1	? ?	3 2	300 16	毛布1,耳飾り1, 貝製首飾り1
Dalimpos Ambaal Erim	カライ1,テノム2 カライ1 カライ1	グロック1 0 0	反物1,衣類4 衣類3 衣類2	1 1 1	250 25 30	貝製首飾り2,金指輪1 貝製首飾り1 貝製首飾り1
Kukumon	カライ2,テノム1	0	反物1,衣類15	3	230	
Eson Pangias Panawari Asin	カライ1 0 カライ1 カライ1	バン1 タンブナン1 0 0	反物1,衣類16 ? 衣類5 衣類1	3 ? 1 1	300 50 100 100	腕時計1,金耳飾り1,金指輪1,毛布1
Angkawot Balua	カライ1 テノム1	0 トゥンバガ1	衣類8 反物1,衣類9	2	300	腕時計1
Akal S. Ukot Rulina	カライ1 テノム1 0	0 0 0	衣類1 衣類1 0	1 1 1	150 ? ?	
Bokol	テノム1	タヌブナン1	反物1	3	300	金耳飾り2,金指輪2,貝製首飾り1
Angkasau Urin	テノム1 テノム1	0 0	反物1,衣類10 衣類4	3 0	180 40	貝製首飾り1,テーブルコーダー1 貝製首飾り1
Ahui Ekok Buntung	ビスクル1 0 0	0 0 0	? ? ?	? ? ?	? ? ?	銀貨製ベルト1,金指輪1
Umin Salipang Kasim Tanis	カライ1,テノム1 0 0 0	0 0 0 0	衣類6 衣類3 衣類2 衣類7	1 1 1 1	? ? ? ?	貝製首飾り1,金耳飾り1
Akal K. Ambalor	0 0	タンブナン1 0	衣類3 衣類2	2 1	100	
Abuh	テノム1	バン1,グロック1	反物1,衣類5	3	200	貝製首飾り1
Ukin Ekok	カライ1,テノム1	グロック1	衣類11	3	70	金耳飾り1,貝製首飾り1
Elik Ilap	テノム2	0	反物1	4	150	腕時計1,金耳飾り1
Unih Amuau	カライ1,テノム1	グロック1	衣類11	3	190	
Samaan	テノム2	0	反物1	2	?	貝製首飾り1
John	カライ3	0	衣類6	3	100	貝製首飾り1,腕時計1
Andua Birin	0	グロック1	衣類5	3	100	
Popolong Samini Taing	0 カライ2 テノム1	0 0 0	衣類10	0 0 0	100 ? ?	腕時計2
(Lindas)	—	—	—	—	—	—
(Himbulan)	—	—	—	—	—	—
(Andapa)	—	—	—	—	—	—
(Kawati)	—	—	—	—	—	—
合計	40	13	反物11,衣類126以上	58以上	3631以上	金指輪5,金耳飾り8,貝製首飾り12,腕時計7等

表10 賓客側における婚資の調達（埋葬と忌み明けの儀礼）

名前	壺の種類と個数	ドラの種類と個数	布地または衣類	現金 (M\$)	その他
Ampakat Ongkoro	カライ 4 —	トゥンバガ 1 —	衣類 10 —	0 —	不参加
Amihang Omphol Sauri Kawati	テノム 1 — —	トゥンバガ 1 — —	衣類 16 — —	30 — —	貝製首飾り 1 不参加 不参加
Dalimpos Ambaal Erim	カライ 1, テノム 2 (カライ 1) —	パン 1 — —	衣類 5 — —	0 — —	腕時計 1, 金指輪 1 不参加 不参加
Kukumon	テノム 2	0	衣類 4	20	
Eson Pngias Panawari Asin	カライ 3, テノム 1 — — —	パン 1 — — —	? — — —	? — — —	不参加 不参加 不参加
Angkawot Balua	カライ 1, テノム 1 カライ 1	タンブナン 1 0	衣類 9 衣類 3	90 ?	
Akal S. Ukot Rulina	? — —	パン 1 — —	衣類 2 — —	30 — —	不参加 不参加
Bokol	カライ 1	パン 1	衣類 10	0	貝製首飾り 2, 金指輪 2
Angkasau Urin	— —	— —	— —	— —	不参加 不参加
Ahui Ekok Buntung	テノム 1 — —	0 — —	? — —	? — —	不参加 不参加
Umin Salipang Kasim Tanis	カライ 1 ? カライ 1 カライ 1	? ? 0 0	衣類 1 衣類 1 衣類 1 衣類 1	20 0 0 0	
Akal K. Ambalor	カライ 1 —	0 —	衣類 2 —	? —	不参加
Abuh	カライ 2, ティハ 1	0	衣類 3	0	途中で帰宅
Ukin Ekok	ビナラユンガン 1	0	衣類 2	10	
Elik Ilap	? —	0 —	衣類 2 —	10 —	
Unih Amuau	テノム 1	0	衣類 7	0	貝製首飾り 1
Sama'an	—	—	—	—	不参加
John	—	—	(衣類 2)	—	不参加
Andua Birin	テノム 1	0	衣類 1	0	
Popolong Samini Taing	0 — —	0 — —	衣類 2 — —	30 — —	不参加 不参加
Himbulan	0	トゥンバガ 1	0	0	
(Lindas)	—	—	—	—	
(Andapa)	—	—	—	—	

6. 婚資と食物の分配

1) 婚資の分配

既に述べたように、婚資を受け取った主催者側の Tarisan は、それらをまず主催者と共催者の間で分配した。分配を受けた主催者や共催者は、さらにそれを各自の手伝いに分配した。バギンパヤン儀礼における、分配の最終的な結果を示したものが表11である（表11参照）。

儀礼の主催者や共催者たちは、少なくとも数個の壺やドラ、反物、ビーズ製の飾り等を受け取っており、全体として彼らはほぼ平均して分配に与っているといえよう。手伝いについて見るならば、主催者 Tarisan の手伝いである Abi や Andua, Ensu らはそれぞれ、壺やドラを1つずつ分配されている。同様に、主催者 Talimoh の手伝いである Angawai や Angkaus も壺やドラを1つずつ受け取っている。また、共催者 Angkuyung の手伝いである Ampalus や Andahang, Rimih, Aguran らも、壺やドラの分配を受けている。それ以外の手伝いは、一見すると、婚資の分配には与っていないように思われる。しかし、共催者たちは提供した食物に対して現金での返礼を受け取っていたので、そこから各自の手伝いにくらかの現金を手渡していた²⁷⁾。従って、バギンパヤン儀礼において主催者側として参加したすべての者が、何らかの「婚資」の分配を受けていたということができよう。

2) 食物の分配

主催者側から賓客側に「引き出物」として贈与された食物は米が3袋と9缶、及び籐製かご1杯分（合計約 130 kg）、発酵肉が1缶と大壺1、小壺1個分、牛の肉が半頭分、砂糖が2袋（約 40 kg）、ビスケットが3缶分等であった。

賓客側では、「引き出物」を招待客の間ではほぼ均等に分配した²⁸⁾。米や砂糖、発酵肉などについては、まずすべてを袋や壺等の入れ物から取り出してござの上に広げ、衆人環視のもとで均等に分配していった。また牛肉等に関しても、各部の肉を細かく切り刻んだ上で、各自にすべての部位の肉が等しく行き渡るような配慮がなされていた。

以上のような分配の結果、招待客の一人である Dalimpos は米を3ガンタン（約14 l）、発酵肉を約8キログラム、牛の生肉を約6キログラム、砂糖を1ガンタン（4.5 l）、

表11 主催者側における婚資の分配

名前	壺		ドラ		反物	ビーズ製飾り (連)
	個数	種類	個数	種類		
Ambikin	1	カライ	1	バシ	1	0
Parisa	2	カライ, テノム	1	グロック	1	3
Tarisan	2	カライ, テノム	1	バシ	1	3
Abi	1	カライ	1	グロック	0	0
Andua	1	カライ	1	グロック	0	0
Ensu	1	カライ	1	バシ	0	3
Silin	2	カライ, テノム	0	—	0	0
Talimoh	3	カライ 3	1	トゥンバガ	1	3
Angawai	1	テノム	1	トゥンバガ	1	3
Angkaus	1	ビナラユンガン	1	バシ	1	3
Raikul	2	カライ 2	1	トゥンバガ	1	3
Aping	1	カライ	1	グロック	0	0
Baalon	3	ビナラユンガン, カライ, テノム	1	バシ	1	3
Ambalor	2	カライ, テノム	1	グロック	0	3
Mansang	1	テノム	1	トゥンバガ	1	3
Buntung	2	ビナラユンゴン, マンクオム	1	バシ	1	3
Antony	1	カライ	1	グロック	0	3
Angkuyung	1	テノム	0	—	0	3
Ampalus	1	カライ	1	グロック	0	3
Andahang	1	テノム	0	—	0	3
Rimih	2	カライ 2	0	—	0	3
Aguran	0	—	1	バシ	0	0
Angkapuk	2	カライ 1, テノム 1	1	グロック	0	3
Manggas	1	テノム	0	—	0	0
Misin	1	カライ	1	グロック	0	3
Tanis	1	カライ	0	—	0	0
Erik	1	カライ	0	—	0	0
Elly	1	テノム	0	—	0	0

ビスケットを大皿 1 枚分受け取った。

招待客は、受け取った食物をさらに各自が同行した客に分配した。上記の Dalimpos の場合、彼は Ambaal と Erim の 2 人の同行客を誘ってきていたので、彼らに対してそれぞれ米約 0.5 ガンタン (約 2.3 l), 発酵肉約 1 キログラム, 牛の生肉約 1 キロ

グラム、砂糖小皿1盛り、ビスケット小皿1盛りを分配した。このようにきわめて少量ではあるが、すべての招待客とその同行客に何らかの食物の分配がなされた。

7. 贈与交換関係の連鎖

以下では、埋葬、忌み明けの儀礼及びバギンパヤン儀礼に参加した人々の社会関係を、親族関係と贈与交換関係から検討する。まず、主催者側と賓客側に分けて参加者間の関係を個別に検討し、次に両者を比較対照して検討することでマルチ社会の社会関係の特徴を明らかにする。

1) 儀礼参加者の系譜関係

①主催者側

a. 主催者と共催者

主催者側の参加者は、儀礼における役割から、主催者と共催者、及び彼らの手伝いに分けられることは既に述べた。

主催者は故 *Anguyung* の3人の息子たち、年長順に *Tarisan*, *Talimoh*, *Raikul* であった。故人の妻 *Ambilus* ももちろん儀礼に参加していたが、賓客を自らもてなすこともなく、儀礼中に繰り返された贈与交換において主導的役割を果たすこともなかった。主催者として埋葬や儀礼を主導していたのは、年老いた故人を生前扶養していた *Tarisan* であった。故人と *Tarisan* はロングハウス B の同じ個室を共有し、食事ともにとっていた。*Tarisan* の弟たちである *Talimoh* と *Raikul* は、*Tarisan* と同じロングハウス B に住んでいたが、それぞれ別の個室を持ち食事も別にとっていた。

Tarisan の2人の息子たちは未婚で、父 *Tarisan* と同じ個室を共有していた。未婚のものが儀礼の共催者となることはまれであるが、今回のバギンパヤン儀礼では、父 *Tarisan* の意向で共催者として儀礼に参加した²⁹⁾。

ところで、共催者の *Ambikin* と *Parisa* はティナドック村のロングハウス A に住んでいる。主催者たちとは別のロングハウスに住むが、*Ambikin* は故 *Anguyung* の兄弟、*Parisa* は故人の父方イトコの子であって、系譜上は極めて近い関係にある(図3参照)。マルチ社会では、父系親族が同一のロングハウスに住む傾向にある[上杉1991a参照]。従って、*Ambikin* と *Parisa* の両名も本来ならば主催者たちと同じロングハウスに住んでいるはずである。両者が別のロングハウスに住んでいたのは、彼らがイスラム教に改宗していたためと思われる。

共催者である Baalon, Ambalor, Ampungit, Aping らは、主催者と同じロングハウス B に住む。彼らは、主催者たちとは血縁関係にはなく（図 3 参照）、もともとは他のロングハウスに住んでいたという。しかし、森林伐採業者が補償の一環としてティナンドゥック村にロングハウスを建設することになったため、辺鄙なかつてのロングハウスを捨てて、彼らの女性親族である Ambilus の嫁ぎ先のティナンドゥック村に移住してきたという。

儀礼に共催者として参加したロングハウス C の住人たちも、近年他所からティナンドゥック村に移住してきた集団である。彼らは、親族関係という観点から見ると、大きく 4 つの系統に分けられる（図 3 参照）。その内の 3 つの集団は、系譜関係は明確でないが、2～3 世代前まではイトコ（*pahaka' antukir ra matuo*）関係にあったと考えられている。

以上、主催者と共催者の親族関係を検討したが、彼らは同一のロングハウスないし村に住む、父系親族を中心とした地域集団ということができよう。ムルット社会では父方居住婚が優先されるため、ある特定のロングハウスの住人も父系親族関係にあることが多い【上杉 1991a; HARRIS 1990】。彼らは、今回のバギンバヤン儀礼で見られたように、婚資や食物等の調達や分配において相互に協力しあう。ただし、ティナンドゥック村の場合には、複数のロングハウス成員が融合しているので、父系の親族関係ばかりでなく、同一の村に居住するという居住関係が相互協力の重要な要因となっていると言えよう。

b. 主催者・共催者と手伝い

まず、主催者と手伝いの関係を検討してみたい。

主催者である Tarisan の場合には、5 家族が手伝いとして儀礼に参加していた。その内の 3 家族は妻方親族である（図 5 参照）。すなわち、彼の手伝いの Langis と Kinawa はそれぞれ妻の父と妻の兄弟である。手伝いの Langis は、彼自身も Ambaal を手伝いとして同行していたが、Ambaal は Langis の妻の兄弟である。一方、手伝いの Andua と Abi は、Tarisan の姉妹の息子たちである。彼らはティナンドゥック村の近くに住み、彼らの両親が儀礼に参加することもあって手伝いにやってきていた。

主催者である Talimoh の場合には、妻方の親族のみが手伝いとしてやってきていた（図 6 参照）。Tirik は妻の兄弟、Musa は妻の兄弟の子である。Angawai と Basidir は妻の母のイトコとその子である。彼らは、Talimoh の直接の手伝いではなく、Sikin が誘ってきた彼女の手伝いである。

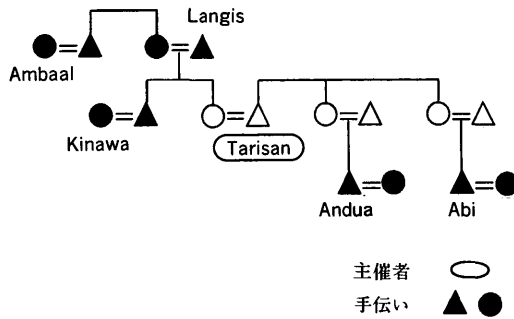


図5 主催者 (Tarisan) とその手伝い

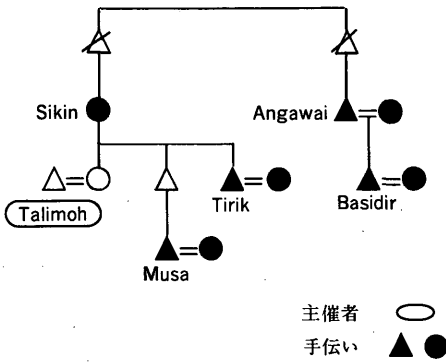


図6 主催者 (Talimoh) とその手伝い

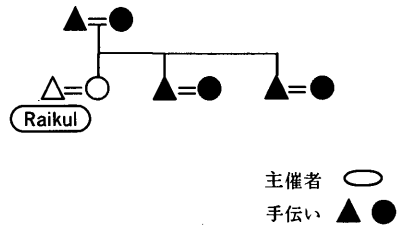


図7 主催者 (Raikul) とその手伝い

主催者 Raikul の手伝いは3家族で、すべて妻方の近親であった (図7参照)。彼らは、妻の両親と、妻の2組の兄弟夫婦であった。

次に、共催者と手伝いの系譜関係を見てみたい。

共催者 Aping や Mansang, Ampalus, Angkuyung の手伝いは、妻の兄弟夫婦のみであった (図8, 図11, 図14, 図15参照)。また、Buntung の場合には妻の兄弟自体は手伝いに来ていなかったが、その代わりに妻の兄弟の息子夫婦が来ていた (図12参照)。Baalon の場合には、手伝いは妻の両親と妻の兄弟たちの夫婦であった (図9参照)。これらの複合形態として、Rimih の手伝いの事例が挙げられよう (図16参照)。Rimih の場合には、妻の両親と兄弟、妻の兄弟の息子夫婦が手伝いに来ていた。

一方、共催者の Ambalor の場合には、手伝いは同居している息子 Tanis 夫婦のみであった (図10参照)。この場合には手伝いと言うよりも、むしろ親子の協同と言った方が良いのかも知れない。しかし、正式な儀礼参加者はあくまで Ambalor であって、息子夫婦はその手伝いに徹していた。こうした意味で、Ambalor の息子夫婦は

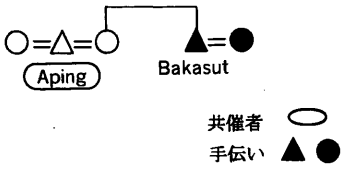


図8 共催者 (Aping) とその手伝い

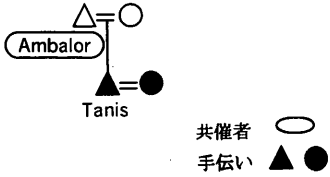


図10 共催者 (Ambalor) とその手伝い

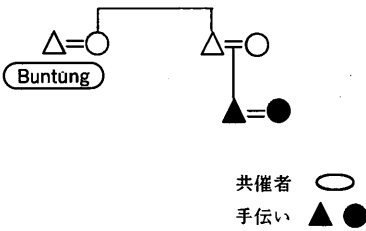


図12 共催者 (Buntung) とその手伝い

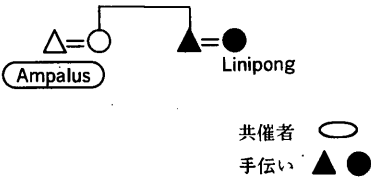


図14 共催者 (Ampalus) とその手伝い

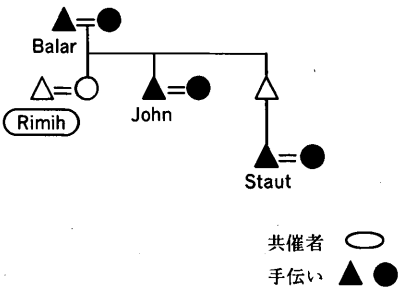


図16 共催者 (Rimih) とその手伝い

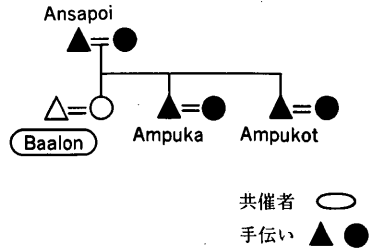


図9 共催者 (Baalon) とその手伝い

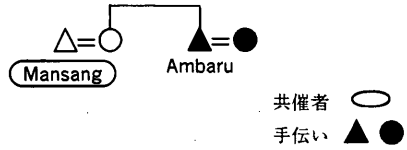


図11 共催者 (Mansang) とその手伝い

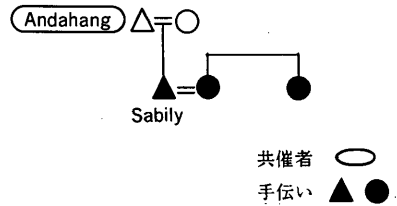


図13 共催者 (Andahang) とその手伝い

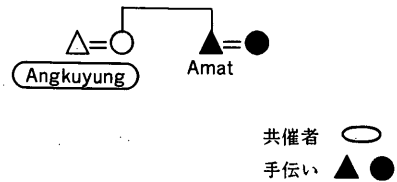


図15 共催者 (Angkuyung) とその手伝い

あくまでも手伝いというべきであろう。この事例とよく似ているのが *Andahang* の場合で、息子夫婦と息子の妻の姉妹が協同して調理や接待にあっていた(図13参照)。

以上、主催者と手伝い、共催者と手伝いと親族関係を個別に検討してきたが、要するに、手伝いは妻方の父系親族を主体とするということができる。手伝いがさらに自分の手伝いを同行ないし誘って来る場合にも、基本的な系譜関係はこれとまったく同じで、後者は前者の妻方の父系親族である。

②賓客側

埋葬や忌み明けの儀礼、バギンパヤン儀礼における客は、主催者や共催者から招かれた招待客と、彼らが誘ってきた同行客、及び援助物資であるタバンを持ち寄った客に分けられることは既に述べた。以下、主催者・共催者と招待客、招待客と同行客、そして主催者・共催者とタバンを持ち寄った者との系譜関係をそれぞれ別個に検討してみたい。

a. 主催者・共催者と招待客

既に示したように、今回のバギンパヤン儀礼では、主催者と共催者がそれぞれ個別に客を招待していた。招待客は、主催者側からしばしばトゥマキン (*tumakin*) と呼ばれたり言及されたりする。

トゥマキンが「娘の夫」のほかには、「姉妹の夫」や「イトコの夫」等、ロングハウス居住集団のようなある特定の社会集団の女性と結婚した男性を指示することは既に述べた。

さて、招待客の *Amihang*, *Eson*, *Bokol*, *Ampakat*, *Dalimpos* は、当バギンパヤン儀礼の対象であった故 *Anguyung* の娘の夫、すなわち狭義のトゥマキンである(図17参照)。また、*Abuh*, *Unih*, *Angkasau* は、主催者である *Tarisan* ないし *Talimoh* の娘の夫(狭義のトゥマキン)である。イスラム教徒の *Lindas* は、今回のバギンパヤン儀礼がイスラム教の断食行事に重なったため参加しなかったが、故 *Anguyung* の兄弟の娘の夫(広義のトゥマキン)である。

一方、招待客の内、*Kukumon* や *Angkawot*, *Akal S.*, *Ukin*, *Popolong*, *Andapa* らは、故人や主催者の娘の夫(狭義のトゥマキン)ではない。しかし、彼らはすべて共催者の娘の夫であって、故人ないし儀礼主催者の広義のトゥマキンに含まれる³⁰⁾。

このように、バギンパヤン儀礼の招待客は、主催者や共催者等の娘の夫ないし姉妹の夫(広義のトゥマキン)ということができる。

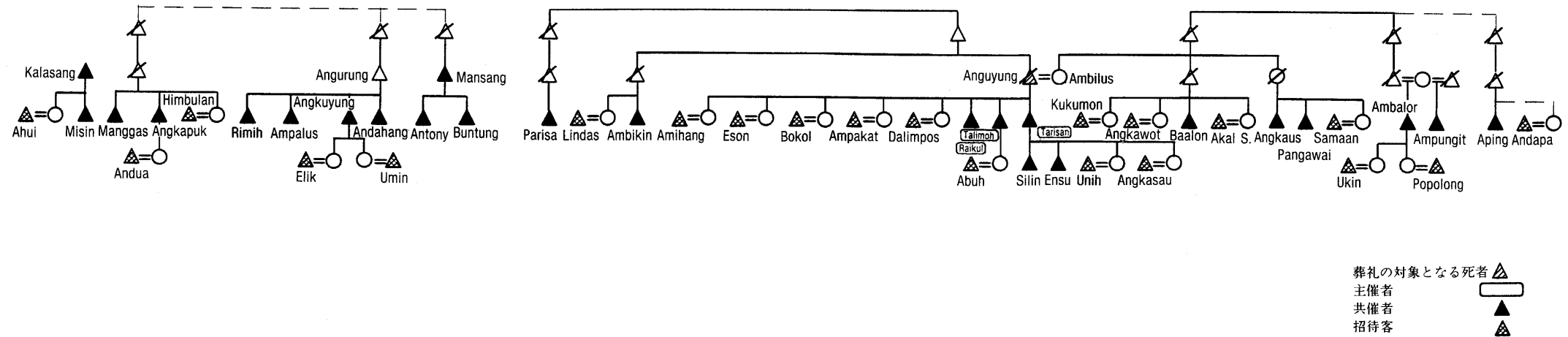


図17 主権者・共催者と招待客の親族関係

b. 招待客と同行客

主催者や共催者に招待された招待客たちは、既に触れたように、ふつうはさらにそれぞれが同行客を伴って儀礼に参加する。

招待客である Amihang の場合を見てみると、彼は娘の夫と父の姉妹の娘の夫を同行している（図18参照）。この場合、同行客は Amihang の広義のトゥマキンということになる。また、Eson の場合には、Boko, Juan, Asin, Panawari の家族を同行しているが、彼らは Eson の「姉妹の夫」であって、やはり広義のトゥマキンとすることができる（図19参照）。同様に、Ampakat（図20参照）、Dalimpos（図21参照）、Angkasau（図23参照）、Akai S.（図25参照）、Akai K.（図27参照）、Umin（図29参照）、Ahui（図31参照）らも、彼らの娘の夫や姉妹の夫等の広義のトゥマキンを客として同行してきている。

これに対して、招待客の Unih（図22参照）や Angkawot（図24参照）、Ukin（図26参照）、Abuh（図28参照）、Andua（図30参照）らは、トゥマキンではなく、彼らの親や息子らの近親を同行して儀礼に参加していた。

以上、要するに、バギンバヤン儀礼で招待客が同行した客（同行客）は、娘の夫や姉妹の夫たちという、招待客のトゥマキン（広義）を中心としてしていると特徴付けるこ

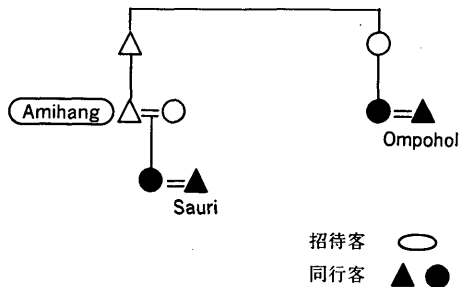


図18 招待客 (Amihang) とその同行客

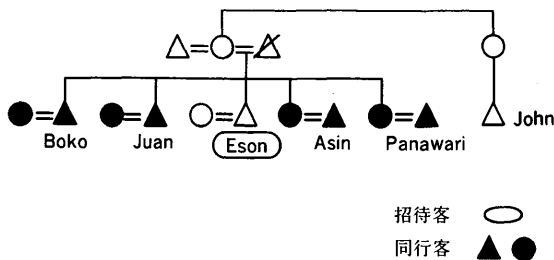


図19 招待客 (Eson) とその同行客

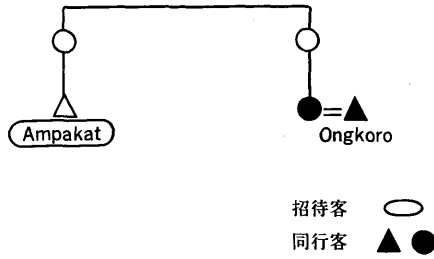


図20 招待客 (Ampakat) とその同行客

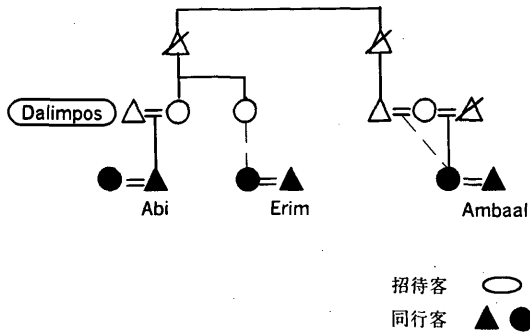


図21 招待客 (Dalimpos) とその同行客

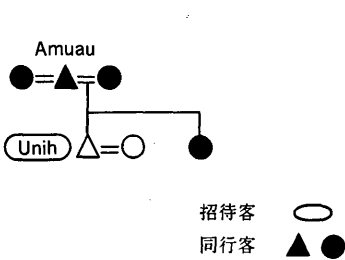


図22 招待客 (Unih) とその同行客

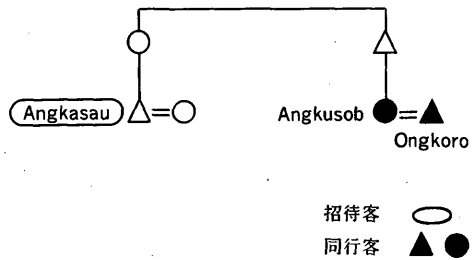


図23 招待客 (Angkasau) とその同行客

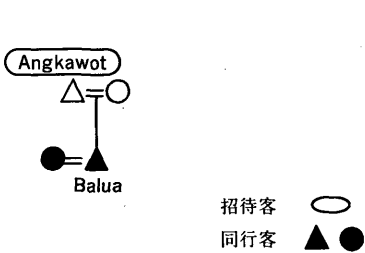


図24 招待客 (Angkawot) とその同行客

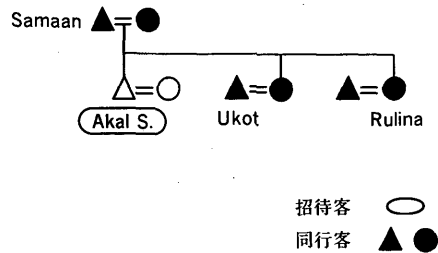
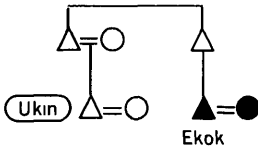
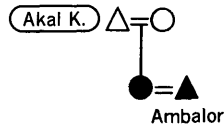


図25 招待客 (Akal S.) とその同行客



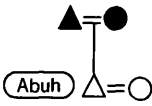
招待客 ○
同行客 ▲ ●

図26 招待客 (Ukin) とその同行客



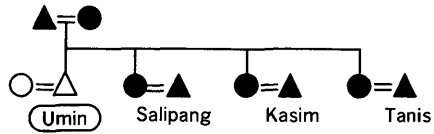
招待客 ○
同行客 ▲ ●

図27 招待客 (Akal K.) とその同行客



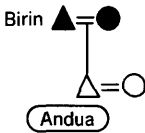
招待客 ○
同行客 ▲ ●

図28 招待客 (Abuh) とその同行客



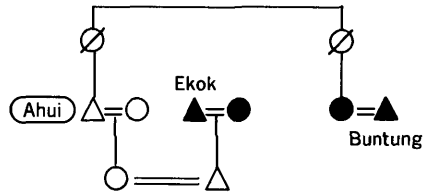
招待客 ○
同行客 ▲ ●

図29 招待客 (Umin) とその同行客



招待客 ○
同行客 ▲ ●

図30 招待客 (Andua) とその同行客



招待客 ○
同行客 ▲ ●

図31 招待客 (Ahui) とその同行客

とができよう。

2) 相互扶助関係

忌み明けの儀礼やパギンパヤン儀礼には、タバンと称する食物や薪等の援助物資を届ける人々が客として参加していた。今回のパギンパヤン儀礼においては、シブアヨ村とシカラボット村、シカラバアン村の3つの村からタバンが届けられた。シブアヨ村とシカラボット村はティナンドゥック村の下流にあり、ボートを使って約10～20分ほどの比較的近い所にある。一方、シカラバアン村はやや遠方に位置する。

タバンによる村落間ないしロングハウス間の相互扶助は、等価の贈与交換の原則に

基づいている。

シカラボット村の代表者によると、今回ティナンドゥック村へタバンを届けたのは、以前彼らがティナンドゥック村から受け取ったタバンに対する「お返し」だという。シカラボット村では、かつて1983年にバギンパヤン儀礼を開催した。その時、ティナンドゥック村から同村へ、2壺分の酒と竹筒製容器 (*tungku*) 2本分の発酵肉、半頭分の豚肉等がタバンとして届けられた。そこで、7年後の1990年にティナンドゥック村でバギンパヤン儀礼が開催されるのを聞き及び、自主的にタバンを持ち寄ったというのである。

シプアヨ村についても同様に、今回のタバンの持参は以前提供されたそれへの「お返し」であった。同村では1984年にバギンパヤン儀礼が開催されたことがあり、その際、同村は4畝分の米とバケツ10杯分のタピオカ、鱈の缶詰50個、竹筒製容器5本分の発酵肉、ホエジカ1頭、10壺分の酒をティナンドゥック村から提供してもらったという。これに対して、シプアヨ村は、今回のバギンパヤン儀礼でシカラボット村と協力して酒や米、タピオカ等を持ち寄ってお返しをした。

一方、シカラバアン村からのタバンは、過去のタバンに対する「お返し」ではない。ティナンドゥック村の村長によると、彼らはかつて1983年にタバンをシカラバアン村に提供したという。しかし、これに対しては、1985年に既に「返済」が済んでいるという。今回のタバンの持ち込みは、シカラバアン村の村びとのまったく自発的な援助であった。しかし、これは同時に新たな相互扶助関係の開始を意味している。というのも、ティナンドゥック村は、シカラバアン村で開催される同種の儀礼（バギンパヤン儀礼）において、いずれは「負債」を返済しなければならないからである。「債権者」であったティナンドゥック村は今や逆に、シカラバアン村に対して「負債」を負ったことになる。

タバンを「返済」する場合には、バギンパヤン儀礼におけるタバンに対してはバギンパヤン儀礼におけるそれで反対給付を行うというように、原則として同種の儀礼において行うのがふつうである。このため、シカラボット村やシプアヨ村の例に見られたように、当初の贈与（タバン）に対する反対給付が6年ないし7年後というように数年後になることもまれではない。贈与を受けてからお返しをするまでの間、贈与を受けた村ないしロングハウスは贈与をした村に対して「負債」を負うことになる。従って、タバンとしての援助品目や数量は通常、村の書記係り等によって記録されている。そして、同種の儀礼が負債を負っている村ないしロングハウスで開催される場合には、負債のある村は要請がなくとも援助に出向くのが一般的である。ティナンドゥ

ック村で開催された今回のパギンパヤン儀礼においても、シカラボット村とシブアヨ村の両村は、過去の負債に基づきつつ自発的にタバンを持ち寄った。もちろん、過去の負債関係に基づいて、儀礼の主催者側が負債を負っている村（ロングハウス）に「返済」を要求することもある。

以上、見たように、今回のパギンパヤン儀礼における他村からの援助物資の持ち込みは、村落（ロングハウス）間の等価の贈与交換に基づくものである。この種の村落（ロングハウス）間での相互扶助は、パギンパヤン儀礼のような葬礼における物資の援助だけではない。ロングハウスの新築や水道施設の整備等における、等価の労働力交換としてもムルット社会に広く認められる。また、村落（ロングハウス）間で頻繁に行われている、キキアット (*kikiat*; 「遊び」) ないしイトール・イトール (*itor-itor*; 「運び込み」) と称される、親睦をはかるための祭宴をともなった果物や肉、魚等の持ち込みないし大量消費にも、同様の等価の贈与交換の原則が認められる³¹⁾。

タバンの贈与交換のような相互扶助は、同一の河川流域沿いの近接した村（ロングハウス）の間で行われることが多い。そうした村ないしロングハウスの間には母村と子村という移住関係や、近しい親族（血族）関係が認められる傾向がある。しかし、必ずしもそうした関係があるわけではないし、またそれがこの種の相互扶助関係の開始に必要というわけでもない。実際、今回のパギンパヤン儀礼を開催したティナンドック村と、タバンを持参したシブアヨ村やシカラボット村、シカラバアン村の村人の間には婚姻関係はあるものの、明瞭な移住ないし親族関係はない。儀礼参加者たちも、そうした移住関係や親族関係の存在を相互扶助の理由としてことさらに挙げるものもなかった。要するに、村落（ロングハウス）間のタバンの相互扶助は、等価の贈与交換に基づいた社会関係とみなされるべきものである。

3) 儀礼における社会関係のモデル

以上、ティナンドック村で1990年に開催されたパギンパヤン儀礼を例として、ムルット社会における儀礼の参加者の間に見られる贈与交換関係や社会関係を検討してきた。

儀礼の参加者たちは、儀礼における役割という点から、主催者側においては主催者—共催者—手伝いに分けられた。また、賓客側においては、招待客—同行客、及びタバンを持ち寄った村の者に分けられた。

これに対して、親族関係の検討からは、主催者側においては、主催者と共催者の間に同一の村（ロングハウス）に居住する父（男）系親族関係が見られた。また、主催

者・共催者と手伝い、または手伝いとその手伝いの間には、妻の両親と娘の夫ないし妻の兄弟と姉妹の夫という姻戚関係の連鎖が見られた。一方、賓客側においては、招待客と同行客、または同行客とその同行客の間に、妻の両親と娘の夫ないし妻の兄弟と姉妹の夫という姻戚関係の連鎖が見られた。このような連鎖関係を示したものが、図32と図33の、葬礼（バギンパヤン儀礼）における社会関係のモデルである（図32、図33参照）。

図32の右半分には、主催者側の主催者—共催者—手伝いの連鎖を示してある。また、左半分には、賓客側の招待客—同行客の連鎖と、タバンを持ち寄った村を示してある。図33には、図32に対応させた親族関係の一般的なモデルを示してある。すなわち、主催者側の主催者と共催者の間には兄弟関係が、主催者・共催者と手伝いの間には姉妹の夫と妻の兄弟という関係が対応している。一方、賓客側の招待客と同行客、同行客とその同行客の間には妻の兄弟と姉妹の夫という関係が対応している。

図32と図33にはまた、婚資と食物の贈与交換関係ないし「流れ」も示してある。儀礼全体としては、婚資が受妻者（wife-taker）としての賓客側から、与妻者（wife-giver）としての主催者側へと贈与されている。一方、食物は、与妻者（主催者）側から受妻者側（賓客側）へとまったく逆の方向に流れている。

儀礼参加者の中核部分では、与妻者としての主催者に対して受妻者としての招待客が婚資を贈与している。ところが、賓客側の内部の構造を詳しく見てみると、招待客は同行客に対しては与妻者として婚資を受け取る側になっている。また、一部の同行客はさらに、彼らが誘った同行客に対して与妻者として婚資を受け取っている。

主催者側では、賓客側とはまったく逆の構造が見られる。すなわち、儀礼参加者の中核部分では、主催者は与妻者として賓客側から婚資を受け取っている。ところが、主催者側の内部の構造をさらに詳しく見てみると、主催者や共催者は彼らの手伝いに対しては、受妻者として婚資を分配（贈与）しなければならない立場にある。一部の手伝いはさらに、彼らの手伝いに対して受妻者として婚資を分配（贈与）している。

一方、食物について見てみると、儀礼参加者の中核部分では、与妻者としての主催者側から受妻者としての賓客側に食物は贈与されている。そして、婚資の流れに見たのとはまったく逆方向に、儀礼の参加者全体において、主催者（与妻者）側から賓客（受妻者）側への食物の流れが連鎖状に連なっている。

葬礼の参加者に見られる社会関係を、その構造から見るならば、賓客側における与妻者と受妻者の間の贈与交換関係の構造と、主催者側におけるそれとはまったく同じだが逆さまになっていることがわかっていく。しかしながら、婚資や食物の贈与交換関係

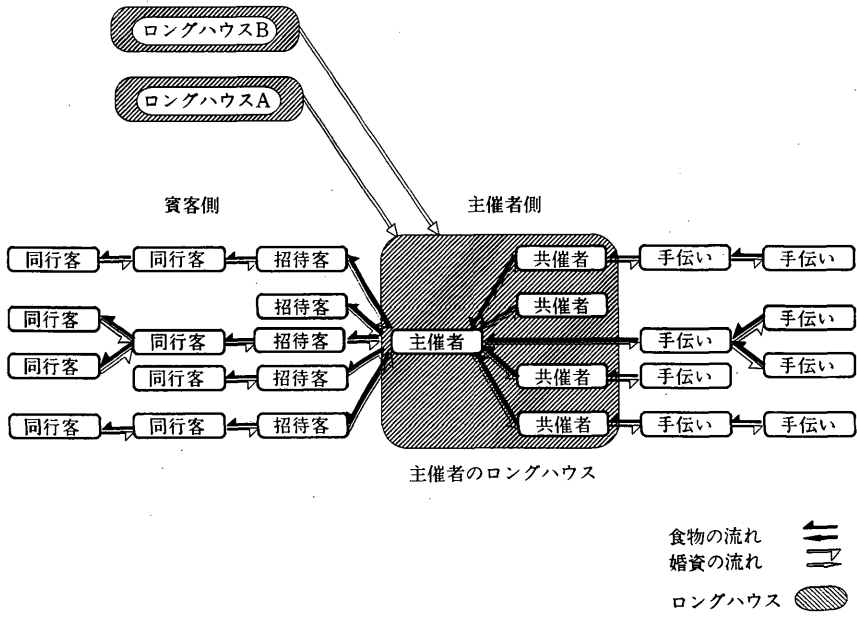


図32 葬礼における贈与交換モデル (1)

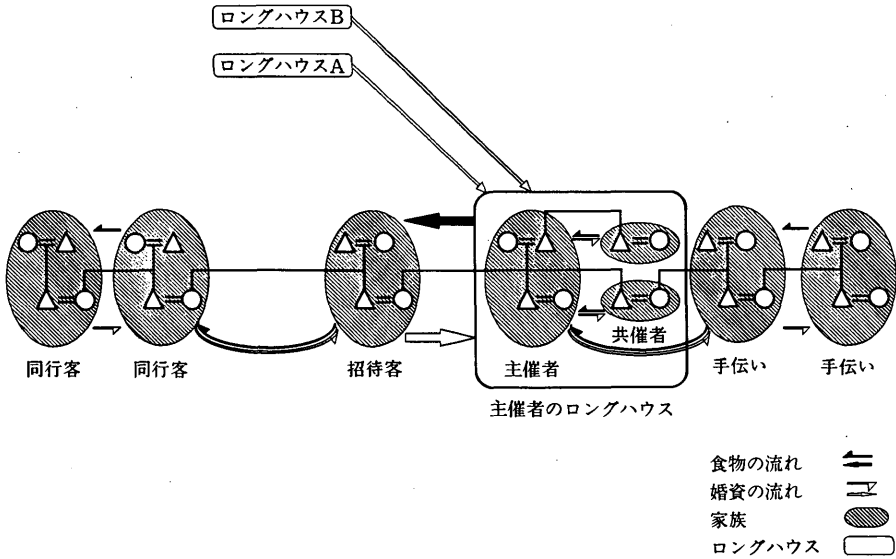


図33 葬礼における贈与交換モデル (2)

自体は儀礼全体を通して整合性が見られ、常に受妻者から与妻者へと婚資が贈与され、与妻者から受妻者へと食物が贈与されている。また、賓客側と主催者側双方において婚資と食物の贈与交換関係の連鎖が見られ、それに基づいて婚資と食物が不可逆的に反対方向に流れることによって儀礼が成立している。

筆者はかつて、ムルット社会における最終段階の婚資贈与儀礼であるティナウ (tinau) 儀礼における婚資と食物の贈与交換を分析して、そこに見られる社会関係のモデルを提出した (図34参照) [上杉 1991a]。今回提示したバギンバヤン儀礼における社会関係のモデルは、構造的な点では、婚姻儀礼における社会関係のモデルと基本的に一致する。すなわち、儀礼の参加者はともに、与妻者と受妻者との間の食物と婚資の不可逆的な贈与交換関係の連鎖に基づいて構造付けられているのである。

しかし、葬礼と婚姻儀礼の参加者の間に見られる社会関係には、以下の点で差が見られる。

まず第一に、婚姻儀礼においては、賓客側は新郎とその親ないし兄弟が主賓となり、彼らと同一のロングハウスに住む、兄弟や父方の親族たちが陪賓となって儀礼に参加していた。これに対して、葬礼では、招待客と同一のロングハウスに住む父 (男) 系親族が参加することは通常ない。つまり、婚姻儀礼においては、受妻者側親族がしばしばロングハウス単位で儀礼に参加するのに対して、葬礼においては、招待客は主催者ないし共催者の娘の夫ないし姉妹の夫 (トゥマキン) の家族として家族単位で儀礼に参加しているのである。

より重要な相違は、葬礼においては、婚姻儀礼では見られなかった、村落 (ロングハウス) 間の等価の贈与交換関係に基づく相互扶助 (タバンの贈与) が見られるとい

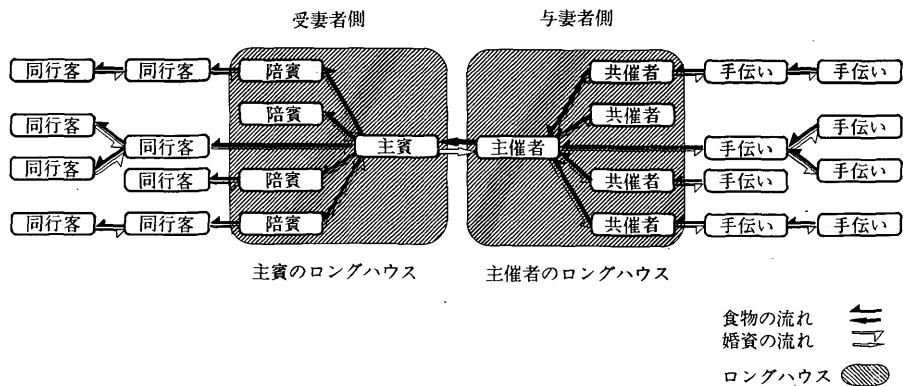


図34 婚礼における贈与交換モデル (1)

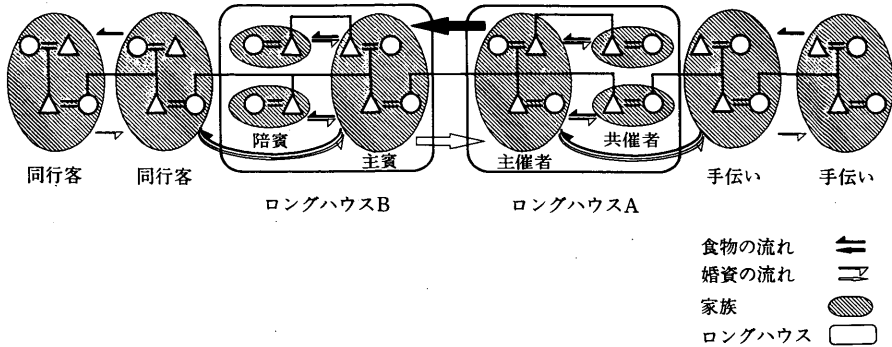


図35 婚礼における贈与交換モデル (2)

うことである。こうした村落（ロングハウス）間の贈与交換ないし相互扶助関係は葬礼のような祭宴の場で結ばれ、長期間にわたって維持されることが多い。また、親族関係の有無や近隣・遠方にかかわらず、村やロングハウス、さらには「森林伐採会社」等のさまざまな「集団」と、任意に関係を結ぶことができるという点で、ムルット社会においてきわめて重要な社会組織・構造原理となっている³²⁾。

おわりに

本稿では、タガル・ムルット社会における、埋葬や忌み明けの儀礼、パギンバヤン儀礼等の葬礼の手順を実例に基づいて記述してきた。その上で、これらの儀礼に見られる労働力や婚資、食物の調達と贈与交換、分配の分析を通して、ムルット社会における社会関係ないし構造の特徴を明らかにしてきた。その結果、以下の諸点が明らかになったと言えよう。

まず第一に、埋葬や忌み明けの儀礼、パギンバヤン儀礼等の儀礼においても、婚姻儀礼等に見られる受妻者と与妻者との間の婚資と食物の贈与交換関係が首尾一貫して見られることが明らかとなった。受妻者である娘の夫ないし姉妹の夫たちは、与妻者である妻の親ないし妻の兄弟が亡くなると参集して遺体の埋葬や墓の造営を行う。それと同時に、受妻者側は壺やドラ等の威信財を最後の「婚資」として与妻者側に贈与する。このようなサービスや贈与に対して、与妻者側は祭宴を催し酒食を提供する。

葬礼における婚資と食物の調達においては、婚姻儀礼におけるのと同様に、婚資と食物の贈与交換関係の連鎖が利用されていた。すなわち、主催者側では与妻者である妻方親族から食物が調達され、一方、賓客側では受妻者である娘の夫ないし姉妹の夫

等から婚資が調達されていたのである。

また、葬礼等の祭宴には、村落（ロングハウス）間の等価の贈与交換に基づく相互扶助関係が存在することが明らかとなった。この種の関係は、姻族関係の連鎖である婚資と食物の贈与交換とはまったく異なった原理に基づいており、マルチ社会に親族関係を越えた広範なネットワークを形成する契機を提供している。

以上に示した姻族間の婚資と食物の不可逆的な贈与交換の連鎖と、ロングハウス(村落)という居住集団間の等価の贈与交換関係によって構造付けられたマルチ社会のモデルは、ボルネオのイバン社会で提示された「キンドレッド・モデル」[cf. FREEMAN 1961] や、東インドネシア諸社会で提示された「縁組みモデル」[デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング他 1987参照]とは異なった社会組織・構造モデル発展の可能性を内包するものと思われる³⁾。

さて、最後に、以上の諸点を、広く双系社会の組織原理ないし構造研究という観点から検討しておきたい。本稿で明らかにしたマルチ社会の婚資と食物の贈与交換の連鎖は、親族関係を重視する立場からすれば、姻族関係の連鎖ないし姻族を含めたカテゴリーとしてのキンドレッドの連鎖とみなすこともできなくはない。しかし、筆者は親族関係そのものとしてではなく、むしろ贈与交換関係の連鎖とみなすべきであると考え。というのは、親族関係の連鎖ないしネットワークはそのままでは意味をなさず、ある特定の社会的な場面において、ある特定の目的のために、ある特定の範囲のそのみが社会的に意味を持つと考えるからである。従って、双系社会において婚資と食物の贈与交換の連鎖や姻族関係の連鎖、キンドレッドの連鎖のような社会関係が、その他の社会関係（例えば、村落ないしロングハウス間の相互扶助としての等価の贈与交換関係）とどのようにして全体としての社会組織・構造原理を構成しているのかということをはっきりとさせるためにも、本稿で示したように、さまざまな社会関係を葬礼等の具体的な社会的文脈とともに記述・分析する必要があると考える。

注

- 1) 本稿は、筆者が1996年に東京都立大学に提出した学位（社会人類学博士）申請論文、『ボルネオ・マルチ社会の贈与交換と社会関係』の第6章第1節に、若干の加筆・修正を施したものである。
- 2) 最近、人類学における親族研究を総括的に検討したホーリー [HOLY 1996: 3] は、科学全般におけるパラダイムの転換に呼応して、親族研究がその確立以来以下のように理論的関心を大きく転換させてきたことを指摘している。すなわち、1) 構造研究からプロセスの研究へ、2) 実在論的研究 (objective science) ないし「実体論的」研究から認識論的研究

(epistemic science) へ、そして3) 部分 (part) 的研究から包括 (whole) 的研究への転換である。

「構造」研究から「プロセス」研究への転換とは、親族を静態的な社会関係の一定のパターン=構造として見るのではなく、実際の社会生活においていかにしてそのような社会関係のパターンが形成されるのかというプロセスから見るということを意味する。家族や世帯を所与のものとしてその構造や機能を研究するのではなく、それを発展周期 (developmental cycle) に応じて動態的に分析したり [Goody (ed.) 1958], 親族集団 (出自集団) を所与のものとしてその構造や機能を研究するのではなく、集団の成立や持続のプロセスをそれらの間の婚姻関係などから動態的に分析する [レヴィ=ストロース 1977] という研究が、プロセスないし動態を重視する研究としてあげられよう。

「実在論的研究」から「認識論的研究」への転換は、シュナイダー [SCHNEIDER 1984] による従来の親族理論の批判に明確に示されている。シュナイダーは、身体的実体 (substance) の連続性 (生物学的な親子関係等) のみを強調する従来の親族理論を批判し、屋敷地や家畜牛、祖先祭祀等の象徴的媒体を通して親族関係ないし集団が成立しうることを指摘した。すなわち、彼はそれまで自明のものとされていた、親族や親族集団の概念の基礎に対して疑問を提出したのである。「実在論的研究」では、親子関係と婚姻を基礎とする親族や親族集団を自明のものとして、そこからその範囲や機能・構造を明らかにしようとする。一方、「認識論的研究」では、親族や親族集団そのものがどのように認識されているのかということの問題にするのである。

「部分的研究」とは、親族やインセストなどが、それ単独で独自の研究領域として存在するという立場からの研究である。これに対して、「包括的研究」とは、それらは単独では意味をなさず、それらを包括するところの社会・文化的全体とともに分析しなければならないとする立場からの研究である。後者の立場に立った代表的な研究としては、スリランカのプル・エリヤ (Pul Eliya) 村を分析したリーチ [LEACH 1961] があげられよう。彼は、親族が独自の研究領域として存在するのではなく、それは土地やその他の財産との関係においてしか「実在」しないと明言している [LEACH 1961: 305]。同様に、テレイ [TERRY 1972] からマルクス主義人類学者は政治・経済との関係から、オートナーとホワイトヘッド [ORTNER and WHITEHEAD 1981] らはジェンダーとの関係からというように、親族をより広い社会関係や現象との関係から研究しようとして試みている。

以上のような研究方向の転換は、ただ単に親族研究の分野のみにとどまらず、人類学全般において生じた理論的な転換でもある。

さて、ここで、人類学における以上のような理論的転換を考慮しつつ、改めて本稿の意義を確認しておきたい。

まず第一に、本稿は「構造」ではなく「プロセス」を分析の対象とすることを明言しておきたい。本稿で扱う社会現象は、人類学の伝統的なトピックである贈与交換である。しかし、本稿の主題は、従来のように贈与交換そのものではない。当該社会において何らかの集団を組織する際に、もっとも重要な社会関係の一つとしてそれがたち現れるからこそ記述や分析の対象とするのであり、その場合にも、集団がどのようにして組織されるのかというプロセスに焦点を当てる。

本稿はまた、親族そのものを扱うものでもない。本稿は、双系社会における社会組織ないし構造原理の析出を目指している。しかし、親族関係を他の社会現象と切り離して単独で記述・分析するようなことはしない。葬礼等の当該社会の具体的な社会的現実 (social reality) に対応する限りにおいて親族関係を記述・分析し、その動態を明らかにする。

本稿においては、贈与交換や親族、親族集団を認識論レベルにまで立ち戻って記述・分析せず、むしろ「実在論的」に扱っている。贈与交換や親族が当該社会の個人によっていかに認識され、選択・操作・調整などがなされているのか、といった認識論レベルの問題も重要ではある。しかし、当該社会の行為者たちがこれらの行為を自明のものとしている以上、そのような問題には深入りせず、そのプロセスを記述・分析する方がより生産的であると考える。

- 3) サバ州では、1970年以降、民族別の人口統計を取っていないので、ムルット族の正確な人口は不明である。1975年の3万6173人 [REGIS 1989: 416], 1978年の3万9289人 [AMINAH 1980] という数字から推定して、サバ州に居住するムルット族の人口は現在約4~5万人程度と思われる。

- 4) 現地調査は、サバ州の内陸郡 (Bahagian Pedalaman)、ナバワン／ブンシアンガン地区 (Daerah Nabawan/Pnensiangan)、バガルンガン・ムキム (Mukim Pagalungan) において、1988年10月から1990年9月の約2年間にわたって実施した。また、1995年3月と1996年の3月には、それぞれ約1カ月の補充調査を行った。
調査の実施にあたっては、マレーシア国民大学の Mohamed Yusoff Ismail, Shamsul Amri Baharuddin, Ghazally Ismail の各博士、Patricia Regis 前サバ博物館館長をはじめとするサバ博物館の館員各位、中央大学の宮本勝教授、国立民族学博物館の田村克己助教授、そしてまた、調査地の村びとにたいへんお世話になった。この場を借りて、感謝する次第である。なお、1995年と1996年の補充調査は、文部省科学研究費補助金による国際学術研究 (研究代表・田村克己国立民族学博物館助教授「変動する東南アジアにおける社会倫理の人類学的研究」[課題番号06041128]) の研究分担者として行ったものである。
- 5) 内陸部のムルット族居住地域を歩くと、道路ないし河川沿いに、派手なベンキを塗った一群の小屋をとときき目にする。屋根はトタンで葺かれ、窓もある立派な高床の「家」である。一見するとふつうの民家のように見えるが、ムルット族の墓である。ムルット族は、かつて遺体を甕棺に入れていたが、その甕棺を安置するのがこの高床の「墓」であった。
- 6) 1988年から1990年にわたる2年間の調査期間中、筆者が甕棺を利用した葬儀を見ることができたのは一度だけであった。
- 7) ルッター [RUTTER 1985 (1929): 215] によると、ムルット族はかつて死者を複葬していた。その際、一次葬では木棺を使い、二次葬で甕棺に納めなおしてその上に屋根を葺いていたという。
- 8) ムルット社会における本来の婚資 (*pulut*) は、通常、婚約、婚礼、ブレイ儀礼、ティナウ儀礼という一連の婚姻儀礼において贈与され、離婚の際の返済に備えてその品名と数量が克明に記録・保管される [上杉 1991a参照]。一方、バギンバヤン儀礼等で贈与される威信材は、本来 (狭義) の婚資のように記録されることはない。従って、厳密に言うならば、両者は区別されねばならない。後者は、ただ単に遺族への「おみやげ (*buah tangan*)」とみなされる場合もある [ZAINI 1969: 112]。しかし、贈与される品が両者で同一であることもあって、後者もしばしば広義の婚資とみなされている。
- 9) ムルット社会における家族は、理想的には、ロングハウス内の個室を占有する、居住や生計、儀礼等において独立した単位ということが出来る。家族 (*sansulapan*) というムルット語も、本来は、「一つの個室 (*sulap*) を占有するものたち」という意味である。しかし、実際には種々の事情から、数家族が一つの個室を占有して生活を共にするということがしばしば見られる。本稿では、以下、独立して焼き畑を経営し、また各種の儀礼において参加主体となる単位を、それが個室を占有するか否かにかかわらず、一つの家族として記述する。
- 10) ムルット族出身の牧師は死者の埋葬には立ち会ったが、遺族や参列者たちと酒食をともにすることや思み明けの儀礼に参加することはなかった。
- 11) 陸稲の植え付け前の3～7月にバギンバヤン儀礼等があらかじめ予想される場合には、稲の作付け面積を事前に増やすことが多い。しかし、今回のように10月半ばに死者が出た場合にはそうしたことができないので、その年の作柄を見て儀礼の開催を決定する。このため、作柄によっては、バギンバヤン儀礼の開催が遺体埋葬の数年後になることもまれではない。
- 12) 近くの招待客に対しては、結縄だけを手渡して口頭で招待することもある。なお、バギンバヤン儀礼等への招待の際には、婚礼時等のように、招待状に米や発酵肉を添えることはない [上杉 1991a参照]。
- 13) 菓子等が盛られた小皿に対しては1マレーシア・ドル、飲み物のポット等に対しては5マレーシア・ドルの現金が返礼として添えられていた。また、タバコ1カートン当たり20マレーシア・ドルが支払われた。こうした嗜好品や食物に対する現金による返礼 (支払い) のため、招待客らは多額の現金を儀礼に持参しなければならない。後述するように、このことが、招待客が多数の同行客を伴って儀礼に参加する理由の一つになっている。
- 14) パキピラン交換は、主催者・共催者 (後述) と招待客の女性の間で行われ、主催者・共催者の手伝いや招待客が伴ってきた同行客が直接参加することはない。彼らは、主催者・共催者や招待客に物品を提供することで、間接的にパキピラン交換に参加するにすぎない。
- 15) タバンを持ち寄った者に対しては、通常、こうした「引き出物」は提供されない。今回のバギンバヤン儀礼では、主催者側の取り計らいで、招待客らとは別に少量の「引き出物」が提供された。

- 16) 分配された衣類の概数は、1口(家族)当たりの分配数から推定した。ただし、儀礼中でも食事への返礼等として女性用腰巻き等の衣類が賓客側から主催者側へ贈られているので、贈与された衣類の総数はここに示した概数よりかなり多い。
- 17) 主催者側から賓客側に贈られる「引き出物」には、ふつう返礼はいっさいなされない。バギンバヤン儀礼は4晩にわたって開催され、「引き出物」は通常儀礼の最終日の第5日目に贈られる。しかし、本稿で記述した儀礼の場合には、第4日目に帰宅する客がいたこともあって、第4日目にまず「引き出物」が贈られた。また、第5日目にも、通常の儀礼の手順を踏んで「引き出物」が再び贈られた。通常より多めの贈り物を受けた賓客側は、このため、それに対するお返しとして通常ではない現金での返礼を行ったのである。
- 18) 後述するように、ティナウ儀礼等の婚姻儀礼においても、主催者や共催者、手伝い等の同様の役割分担が見られる [上杉 1991a 参照]。
- 19) 未婚女性や寡婦等が単独で手伝い等として儀礼に参加する場合もあるが、既婚者は、家族単位で儀礼に参加するのが一般的である。そこで、本稿では以下、儀礼に参加した家族に言及する場合には、家族中の壮年男子(世帯主)名を便宜的に用いることとする。
- 20) 既に述べたように、儀礼に主催者ないし共催者として参加するためには、既婚で独立した家族を形成しているのがふつうである。Tarisanの2人の息子たちは未婚で独立した家族を形成していないので、通常は、儀礼に共催者として参加することはない。
- 21) デューウェルら [DUEWEL and PARTHASARATHY 1972: 15-17]によると、ムルット社会では、1世帯 (household) 当たりの成員数は7.7人であるという。世帯はさらに、既婚の夫婦とその未婚の子ども等から成る、平均1.75の「下位単位 (sub-unit)」から成り立っているという。デューウェルらのいう「下位単位」が本稿の家族に相当するので、1家族当たりの成員数は平均4.4人ということになる。しかし、本稿では、筆者の調査の数値を加味して、1家族の成員数を平均6人として儀礼参加人数を概算した。
- 22) ただし、よくあることだが、彼らが同時に招待客や同行客である場合にはさまざまな贈与交換を行うことになる。実際、ティナドゥック村にタバンを運び込んできたシブアヨ村の13家族の内の1家族 (Akai S.)、シカラボット村の4家族の内の2家族 (Ahui と Andua) は、招待客としても儀礼に参加していた。
- 23) 招待客とタバンを持参した者、主催者ないし共催者の手伝いが重複していることもあるため、実数はそれらを単純に合計した数よりやや少ないと思われる。
- 24) インドネシア領カリマンタン側のムルット (スンバクン・ムルット; Sumbakung Murut) が国境を越えて発酵肉を売りに来ていたのに偶然出会い、その場で水牛1頭と交換して調達したものである。Tarisanによると、発酵肉は、後に詳しく述べる、等価の贈与交換ないし相互扶助であるタバンとして調達することも可能であったという。しかし、タバンとしてインドネシア側のムルットから食物を得ると、彼らを賓客として長期間接待しなければならず、また将来、「負債」の返済に際してはカリマンタン側の彼らの村にまで行かねばならないので費用がかかりすぎるといふ。このため、結局、タバンとしてではなく、その場で水牛と直接交換することにしたという。
- 25) 水牛や牛は事前に購入されたものばかりではなく、客の人数や副食物の多寡を考慮して、儀礼途中にも追加して購入された。ここでは、それらを区別せずに一括して示してある。
- 26) 表3では、主催者および共催者21家族の内の19家族しか示していない。それは、主催者である Tarisan の2人の息子たちも共催者として儀礼に参加していたが、独立した家族ではないので、彼らを Tarisan で代表させているからである。
- 27) もちろん、主催者からの婚資の分配が多ければ、共催者は手伝いに対してそれらの一部を分配するのがふつうである。
- 28) タバンを持ち寄ったシブアヨ村等の者は、儀礼中は招待客同様に客としてもなされていた。しかし、通常、主催者側から食物が「引き出物」として贈られるようなことはない。従って、この時の食物の分配も、招待客とその同行客の間だけに限られる。
- 29) 儀礼の共催者となることは、儀礼中酒はもとより主食としての米、タビオカ、おかずとしての肉、発酵肉を用意しなければならない。また嗜好品として、コーヒーや紅茶、砂糖、タバコ等も調達しなければならない。ムルット社会では、米やキャッサパの栽培はふつう女性の領域に属しており、未婚男性だけでは儀礼に必要な十分な食物を準備することはできない。従って、通常、未婚男性は共催者として儀礼に参加することはできない。
- 30) 招待客の内、John と Akai K., Kawati と主催者ないし共催者との関係は確認できなかった。

- しかし、彼らも主催者たちから、「われわれのトゥマキン (*tumakin mai*)」と呼びかけられたり言及されていたことを考えると、故人や主催者、共催者のいずれかの娘の夫とみなされていることには変わりはない。
- 31) この種の村落(ロングハウス)間の等価の贈与交換とそのネットワークの詳細については、稿を改めて論じたい。
- 32) こうした点を考慮して、筆者は、村落(ロングハウス)間の贈与交換関係を特に「祭宴関係」と呼んでいる【上杉 1986, 1991b参照】。いずれにせよ、この種の関係が、ボルネオの先住民社会でかつて報告されていた「河川流域集団」や「部族」、「同盟」と密接にかかわっていたものと思われる【cf. SUTLIVE 1972, 1978】。
- 33) ムルット社会で提示した社会関係モデルの理論的検討については、稿を改めて論じたい。

文 献

(和文)

上杉富之

- 1986 「イバン族における集団編成のメカニズム」『社会人類学年報』12: 87-116。
- 1991a 「婚資交換儀礼にみられる社会関係——東マレーシア・サバ州ムルット族の事例から」『南方文化』18: 119-154。
- 1991b 「婚資と食物の交換ネットワーク」『季刊民族学』58: 106-113。
- 1992 「ボルネオの焼畑農耕民・ムルット族の労働力調達法」『社会人類学年報』18: 169-185。
- 1993a 「『被告』は必ずしも被告ではない——東マレーシア・ムルット族の原住民裁判所記録の分析から」『アジア・アフリカ言語文化研究』45: 143-162。
- 1993b 「ボルネオ焼畑農耕民の贈与交換」須藤健一・秋道智彌・崎山理編『オセアニア2——伝統に生きる』東京：東京大学出版会, pp. 127-143。
- 1995 「キンドレット」比較家族史学会編『事典家族』東京：弘文堂, pp. 282-283。
- デ=ヨセリン=デ=ヨング, P. E. 他
- 1987 『オランダ構造人類学』宮崎恒二他訳 東京：せりか書房。
- レヴィ=ストロース, C.
- 1977 『親族の基本構造(上・下)』馬淵東一・田島節夫監訳 東京：番町書房。

(欧文・その他)

AMINAH A. F. Musally

- 1980 *Anayman Masyarakat Murut di Sabah: Perhatian Khas di Kawasan Sapulut, Tulid dan Ansip* (Latihan Ilmiah Sesi 1979/80 Universiti Kebangsaan Malaysia).

BROOKE, C.

- 1866 *Ten Years in Sarawak*, 2 vols. London: Tinsley.

DUEWEL, J. and S. PARTHASARATHY

- 1972 *Socio-Economic Survey of Pensingan Murut Households and Their Attitudes towards Resettlement*. Kota Kinabalu: Sabah Padi Board.

DUNN, E.

- 1906 Preface to L. Nyuak, "Religious Rites and Customs of the Iban or Dyaks of Sarawak." *Anthropos* 1: 11-17.

ERIKSEN, T. H.

- 1995 *Small Places, Large Issues: An Introduction to Social and Cultural Anthropology*. London: Pluto Press.

FREEMAN, J. D.

- 1955 *Iban Agriculture: A Report on the Shifting Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak*. London: Her Majesty's Stationery Office.

- 1956 "Utrolateral" and "Utrolocal." *Man* 56: 87-88.

- 1958 The Family System of the Iban of Borneo. In J. R. Goody (ed.), *The Development Cy-*

- cle in Domestic Groups*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 15–52.
- 1960 *The Iban of Western Borneo*. In G. P. Murdock (ed.), *Social Structure in Southeast Asia* (Viking Fund Publications in Anthropology no. 29), New York: Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research Inc., pp. 65–87.
- 1961 On the Concept of the Kindred. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 91: 192–220. (小川正恭訳 1981「キンドレッドの概念について」村武精一編『家族と親族』東京：未来社, pp. 199–229)
- 1970 *Report on the Iban*. London: The Athlone Press.
- 1981 *Some Reflections on the Nature of Iban Society*. Canberra: Australian National University.
- 1992 *The Iban of Borneo*. Kuala Lumpur: S. Abdul Majeed.
- GOMES, E. H.
1911 *Seventeen Years among the Sea Dyaks of Borneo*. London: Seeley.
- GOODY, J. R. (ed.)
1958 *The Developmental Cycle in Domestic Groups*. Cambridge: Cambridge University Press.
- HARRIS, A. S.
1990 *The Tagal Murut*. In S. G. Lingenfelter (ed.), *Social Organization of Sabah Societies*, Kota Kinabalu: Sabah Museum and State Archives Department, pp. 39–61.
- HOLY, L.
1996 *Anthropological Perspectives on Kinship*. London: Pluto Press.
- KEMP, J. and F. HÜSKEN
1991 Cognatic Kinship and Southeast Asia. In F. Hüsken and J. Kemp (eds.), *Cognition and Social Organization in Southeast Asia*, Leiden: KITLV Press, pp. 1–11.
- LEACH, E. R.
1961 *Pul Eliya, a Village in Ceylon: A Study of Land Tenure and Kinship*. Cambridge: Cambridge University Press.
- LOW, H.
1968(1848) *Sarawak: Its Inhabitants and Productions*. London: Frank Cass.
- NEEDHAM, R.
1971 Remarks on the Analysis of Kinship and Marriage. In R. Needham (ed.), *Rethinking Kinship and Marriage*, London: Tavistock, pp. 1–34.
- ORTNER, S. B and H. WHITEHEAD
1981 Introduction. In S. B. Ortner and H. Whitehead (eds.), *Sexual Meanings: The Cultural Construction of Gender and Sexuality*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1–27.
- PRINGLE, R.
1970 *Rajahs and Rebels: The Iban of Sarawak under Brooke Rule, 1841–1941*. London: Macmillan.
- REGIS, Patricia
1989 Demography. In Jeffery G. Kitingan and Maximus J. Ongkili (eds.), *Sabah: 25 Years Later 1963–1988*, Kota Kinabalu: Institute for Development Studies (Sabah), pp. 405–450.
- ROTH, H. L.
1968(1896) *The Natives of Sarawak and British Borneo*, 2 vols. Kuala Lumpur: University of Malaya Press.
- RUTTER, Owen
1985(1929) *The Pagans of North Borneo*. Singapore: Oxford University Press.
- SAHLINS, M. D.
1958 Review of J. D. Freeman, “Iban Agriculture”. *Journal of Polynesian Society* 67: 52–63.
- SCHNEIDER, D.
1984 *A Critique of the Study of Kinship*. Ann Arbor: University of Michigan.

SUTLIVE, V. H., Jr.

1972 *From Longhouse to Pasar: Urbanization in Sarawak, East Malaysia*. Unpublished Ph. D. Thesis, University of Pittsburgh, Ann Arbor: University Microfilms International.

1978 *The Iban of Sarawak*. Arlington Hights: A. H. M. Publishing Corporation.

TERRAY, E.

1972 *Marxism and 'Primitive' Societies*. New York: Monthly Review Press.

UESUGI, Tomiyuki

1995 Bridewealth/Food Exchange and Social Networks among the Murut of Sabah, East Malaysia. *Man and Culture in Oceania* 11: 23-43.

WAGNER, U.

1972 *Colonialism and Iban Warfare*. Stockholm: OBE-Tryck.

ZAINI b. Mohd. Isa

1969 *Kebudayaan dan Adat Resam Kadazan dan Murut*. Kota Bharu: Pustaka Aman Press.